

翻刻『寛政庚申 御用留記』

——医学館世話役多紀元簡が書留めた1800年の幕府医官の記録——

町 泉寿郎

二松学舎大学

解 題

本稿は、慶應義塾大学信濃町メディアセンター所蔵・富士川游旧蔵にかかる『寛政庚申御用留記』（請求記号：Fユ-93）を翻刻してその内容を紹介するものである。同資料は、寛政12年（1800）に幕府医学館の重立世話役である多紀元簡（1755-1810、名は安長）から幕府へ提出した公文書の写しである。同資料の原表紙に「寛政庚申 御用留記 三」と墨書するが、内容は同年2月より12月にいたる文書を収録していて、同資料が同年の文書の留書の3冊目とは考えにくく、「三」の意味は必ずしも明らかでない。終始ほぼ一筆で書写されていると見られ、多紀元簡、もしくはその周辺にある人物によって筆写されたものと見られる。

数え方にもよるが、同資料には38件の文書が収録されており、大別すれば人事と学事に分けられる。文書に通し番号を振り、タイトルをつけて内訳を示せば次の通りである（原文にある見出しをタイトルの次に丸括弧に括って記した）。

学 事

- ①活字本『御薬院方』の清国舶載に関して（御薬院方之義ニ付奉伺候書付）
- ③幕府所蔵医書中、版本の無い書籍の拝借と筆写に関して（無板書拝借願書）
- ⑤吐乳病の乳児に対する治療法についての臨床試験に関して（吐乳病児治療之儀御請書）
- ⑥褐色白斑の獣皮の鑑別について（褐色白斑之獣皮之儀御請書）
- ⑨上野国甘楽郡黒岩村より出土した獣骨の鑑別について（上野国甘楽郡黒岩村方出候角骨之儀申

上候書付）

- ⑬長崎唐館の清国医戴思九と長崎在住の多紀門人との対談の申請
- ⑭吉田長達著『疹科治法綱』の出版申請に関して（吉田長達板行仕度段伺候に付御尋）
- ⑯仁和寺本『医心方』の出版に関する伺書
- ⑰池原雲洞の医学館寄宿願について
- ⑱長崎唐館の清国医戴思九大病のため対話困難なる件
- ㉑京都医家堅田絨造の献上にかかる宋版『本事方』の鑑定

人 事

- ②人見高栄と石坂宗哲の推挙に関して
- ④大膳亮玄碩と大膳亮良俊の学術・人物の評価
- ⑦佐藤祐仙・景南父子、および宇佐美通茂・通義父子に対する評価
- ⑧石坂宗哲への御目見と御褒美の申請
- ⑩岡井運南・立斎父子、畠山玉隆に対する評価
- ⑪外科の表番医師の候補者に関する評価
- ⑫甲府勤番外科村山自白を表番医師に推挙する件
- ⑭竹内玄郁の急養子となる町医師野川玄徳に課した試験の結果について（竹内玄郁急養子願候に付御尋）
- ⑮御広敷廻り担当の医師を新たに任命することに関する意見書（御広敷廻り御医師之儀申上候書付）
- ⑯家督相続に当たり各人物の評価
- ⑰小石川養生所担当の医師の推挙、および小石川養生所出役医師に対する与力・肝煎の不遜を譴責
- ⑱甲府勤番頭より提出された甲府医学所に関する

意見書に対する意見

- ㉓御医師はそれぞれ専門科を守りみだりに他科を侵すべきでないとする意見書(御医師科之儀申上候書付)
- ㉔村岡玄超の評価
- ㉕広井宗寿・笠原養玄の法眼叙任申請
- ㉖兼康栄順・兼康栄元の評価
- ㉗篠崎朴庵の後任の奥医師として池田瑞仙を推挙する件
- ㉘奥医師候補の推薦, および杉浦玄徳に関して(奥御医師御入人之儀申上候書付)
- ㉙医学館講師・世話役手伝・薬調合役への褒美の申請
- ㉚家督相続した吉田栄全・塩田宗栄の復禄願書
- ㉛奥医師候補者の追加推薦(先頃申上候三人之外猶又出精之者壹岐守被申聞候に付左之書付出す)
- ㉜西ノ丸側衆松平佐渡守急死に関して誤診した小島春庵への処分について
- ㉝小石川養生所見習いの候補者に関する評価(小石川養生所見習願候に付御尋)
- ㉞養生所見習を長年勤めてきた御庭方鎌田庭雲への手当の申請
- ㉟石坂宗哲への加増の申請
- ㊱御目見医師井上宗隆, 御広敷廻り勤続につき褒美申請
- ㊲御守殿女中の担当を小児科人見高德にさせたい旨の願書に対する意見

学事 11 件の内訳は, 古書の鑑別や出版・鈔写, 書籍の輸出など書籍に関するものが①③⑯⑳㉑, 獣皮・獣骨の博物学的な鑑別に関するものが⑥⑨, 長崎唐館の清国人医師との筆談に関するものが⑬㉒, 臨床試験に関するものが⑤, 医学館への寄宿願に関するものが㉓となる。

人事 27 件の内訳は, 幕府医官の家督相続や養子など特定の個人の人物・学術を評価したものが②④⑦⑩⑭⑮⑲㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲, 奥医師・表番医師・小石川養生所見習など特定の役職の候補者を推薦したものが⑪⑫⑰⑱㉒㉓, 特定の個人への加増や褒美などを申請したものが⑧⑩⑮⑲㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲, 新たな役

職や機関の設置に関するものが⑮⑱, 幕府医官のあり方に関するものが㉓, 誤診した医官への処分に関するものが㉒となる。医学館への出席や試験結果が人事評価に直接・間接に反映されていることがよく分かる。甲府勤番を勤めあげた石坂宗哲について, 江戸召還, 御目見, 加増を申請していることも注目される。

以上から, 医学館世話役の職掌が具体的に明らかになる。かつて別稿(「多紀元簡失脚の背景—医学館官立化当初の一事情—」本誌第49巻2号所収, 2003年)において同資料を用いて論じたように, 同資料の内容は多紀元簡が奥医師免職の原因となった㉗の奥医師人事をはじめとして, 幕府医官内部の動静が中心である。しかしながら, そうした組織内の閉じた世界のこと以外にも, 他機関との関係で言えば小石川養生所と甲府勤番(医学所)に関するものが散見される。また, 同時代の清国の学術への関心の高さ(『御薬院方』の舶載, 長崎唐館の清国医への接触, 四庫全書総目提要への言及など)や北方産の獣皮や出土獣骨(化石)の鑑別に蘭学知識を援用している例など, 多紀元簡の視野の広がりを感じさせる記事もある。

文書の発行者と受領者から見ると, 発行者としては38件の文書全てにおいて, 医学館の重立世話役として多紀元簡が単独, または連名の筆頭者として名を記している。連名の文書は, 多紀元簡と世話役吉田快庵の2名によるものが②⑤⑲㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲, 多紀元簡・山本宗英・吉田快庵・千田玄知の世話役4名全員によるものが⑪⑫⑭となる。鍼科医官に関する人事には, 多紀元簡と並んで, 医学館の鍼科講師である山崎宗運が名を連ねている。

受領者は, 「撰津守」と表記される若年寄堀田正敦(1755~1832, 初め近江堅田藩のち下野佐野藩主)が最も多く, この時期の幕府医官や医学館に関する案件を好学の文化人としても知られる堀田正敦が最も多く取り扱ったことが示唆される。「出雲守」と表記されるのは, 同じく若年寄を勤めた立花種周(1744~1809, 筑後三池藩主)であり, 「撰津守」に次いで多い。更に「備前守」と表記される同じく若年寄を勤めた京極高久(1729~1808, 丹後峰山藩主)がこれに次ぐ。また, ㉒㉓

などの重要な案件で、「美濃守」と表記される御側御用取次を勤めた平岡頼長に宛てられたものがある。北方産獣皮の鑑定の件や長崎清国人医師との接触など外事に関する案件では、「伊豆守」と表記される老中松平信明（1763～1817、三河吉田藩主）に宛てられたものがある。⑭⑰の文書の受領者として「兵部少輔」と表記されるのは、幕府医官の触頭の立場を勤めてきた典薬頭二家のうちのひとつ今大路家のことと考えられる（その一方、『医心方』提出の件で幕府から譴責された半井家の名は一度も見えない）。

以下の翻刻においては、用字は底本に基づきつつ、漢字に関しては通行の印刷標準字体の範囲内で表記すること基本とした。変体仮名は通行の字体に改めた。読みやすさを考慮して、適宜句読点を施した。原本との対照に配慮して、改丁ごとに末尾に（1a）～（75a）を附した。また、38件の各文書に通し番号を振り、私意によるタイトルをつけた。

底本には、まま朱筆が混じっている。多紀元簡による発行時の文書が墨書で記されているのに対し、その文書を提出した際の取次者や宛先などといった追加的なコメント、その文書を作成するに至った経緯の説明、その文書発行後の推移などは朱筆で記されている。本翻印では、墨書の部分を9ポイント、朱筆の部分を8ポイントで記して区別した。

【翻 刻】

（外題）「寛政庚申 御用留記 三」

（本文）

寛政十二年庚申歳

①活字本『御薬院方』の清国舶載に関して

御薬院方之義ニ付奉伺候書付

小普請御医師 室賀壱岐守支配 千賀道有儀、活字ニ而板行仕候御薬院方之儀、当時唐土ニ亡逸仕候趣ニ候間、何卒渡遣申度旨、小普請支配ニは御座候へ共、医書之儀ニ御座候間、私方此段申上候。

中川飛驒守方江相願、長崎在館唐人共承合候処、先二部渡し候様答書差越申候。依之右之書渡遣不苦儀ニ御座候哉、此段奉伺候。以上。

申二月 多紀安長

十日御祐筆長谷川弥左衛門を以て摂津守殿江上ル。
唐人書付添へ（1a）。

承り付 書面御薬院方之儀、小普請支配を経候ニ及不申、唐土江渡遣候様可仕旨被仰渡、奉承知候。以上。 申二月十六日 多紀安長

右承り付致し、弥左衛門江渡候処、其後弥左衛門飛驒守江掛合候処、唐人共江問合せ候儀、一向不存事ニ而、千賀道有方飛驒守家来江頼ミ承り合せ候事ニ付、承付致難キ段、從飛驒守申候。仍而安長江御下知御座候事ニ候へは、飛驒守名面相除キ、改めて伺書差出候様、弥左衛門飛驒守江談之上、猶又左之書面差出。

同断 小普請御医師、室賀壱岐守支配、千賀道有儀、活字ニ而板行候御薬院方之儀、当時唐土ニ亡逸仕候趣ニ御座候間、何卒渡遣申度旨、道有（1b）申聞候。右之書渡遣不苦儀ニ御座候哉。道有小普請支配ニ御座候へ共、医書之儀ニ御座候間、此段私方奉伺候。以上。

申二月 多紀安長

廿一日
長谷川弥左衛門ヲ以て摂津守殿江上ル。其後御薬院方美濃紙摺一部差出ス（2a）。

千賀道有方差越候唐人共書付写

蒙問御薬院方、邇来無有帶來、現在唐山刊與否俱已領悉、即查敬等未議若何。祈于每局先給一部、帶回唐山查校如果現今無有刊行、則将来再刊、具稟陸續帶回為此具覆。

未十二月

王 兩局船主 沈敬瞻 印
公 劉雲臺 印

医書御薬院方、近来持渡不申、右ハ当時唐国ニ而も版行有之候哉之段被為成御尋、奉承知候。右ハ私共ニも駭と存不申候ニ付、双方江壱部宛何卒御渡被下候ハ、唐国江持帰得ト相糺、若当時版行も無之候ハ、追而申上、追々唐国江持帰度奉願候。此段書付を以御答申上候。

未十一月

王氏 兩局船主 沈敬瞻
十二家 劉雲臺

右書付之通和解差上申候。以上。

彭城莊十郎 (2b)

②人見高栄と石坂宗哲の推挙に関して

奥詰御医師 淑姫君様御附 人見高栄
右高栄儀、此度奥詰被仰付候ニ付、曲直瀬養安院
初メ、並之通り毎周老度ツ、御診被仰付候様仕度
奉願候。以上。

二月 多紀安長 吉田快庵

廿日 頭取大嶋伊豫守ヲ以て美濃守殿江上ル
(3a)。

石坂宗哲儀ニ付奉願候書付

御目見以下 高五人扶持 針科御医師 石坂宗哲
右宗哲儀、寛政八辰十二月廿二日、甲府針科医師
取立之儀被仰付、翌巳年二月廿八日甲府表江到着
仕、講書并ニ経絡穴所取り、針術手段之筋合迄相
談仕候処、逐々出情之者出来仕、別紙名面之通り
ニ御座候旨申越候。最初^{最初被仰渡之年限も}三ヶ年も彼地ニ罷在、一教
導可仕旨被仰渡候所、当年ニ而三ヶ年ニ満且於彼
地相応ニ針療仕候者共取立候儀ニ付、何卒当春被
(3b) 召歸候様仕度、此段奉願候。以上。

朱ノ直シ、撰津守殿御好。

申二月 多紀安長

十五日 撰津守殿江上ル。

三月廿六日御好之通改メ上候様、長谷川弥左衛門
申聞、改書致し相渡。

承付、石坂宗哲歸府之儀、甲府勤番支配江被仰渡
候旨被仰聞、難有奉得其意候。以上。

申聞四月五日 多紀安長

弥左衛門江渡ス。

③幕府所蔵医書中、版本の無い書籍の拝借と筆写 に関して

無板拝借願書

無板書之中

顛顛經 一 産育宝方 二 史載之方 二
医蔵目録 一 急救仙方 二 瑞竹堂経験方 二
右拜見仕度奉願候。以上 (4a)。

三月 多紀安長

廿日 撰津守殿江上ル。

此間奉願、拜見被仰付候、無板書中医書、何れも
有益之書ニ而、難有仕合奉存候。依之何卒右全部
写候様仕度、猶又奉願候。尤被仰付候筋合も御座
候ニ付、随分大切ニ取扱、格段手間取不申様写候
様可仕候。

一 右之内、医蔵目録之末ニ痧疹心法と申候書一
部附キ有之候。痧疹は麻疹之儀ニ而、当年杯ハ麻
疹流行も可仕哉之期ニも御座候へハ、右之書ハ写
候上ニ、世上之為メニ御座候間、可罷成御儀ニ候
ハ、何卒板行仕、広ク (4b) 伝布仕候様、是亦
奉願候。以上。

申三月

廿六日、撰津守殿江伺、翌廿七日書面ニ致し御祐
筆長谷川弥左衛門ヲ以て差上候處、廿九日朱引之
分は抜き差出候様、撰津守殿御直ニ被仰聞、翌卅
日改写致し、猶又御直ニ差上候。

書面御書物写、并ニ板行之儀、可為願之通旨被仰
渡、難有奉得其意候。以上。

申聞四月五日 多紀安長

右承り付、弥左衛門ヲ以て撰津守殿江上ル。

右無板書二帙十冊、布施内蔵允^允請取り、十一月
廿二日写等相濟候ニ付、御城江持参、内蔵允土圭
之間呼出候處、差掛り御用有之、手明ケ兼候旨、
同役間宮平次郎申聞候ニ付、則右御書物平次郎江
相渡、上納之 (5a)。

④大膳亮玄碩と大膳亮良俊の学術・人物の評価

大膳亮玄碩

右玄碩儀、寛政三亥年十月行跡不宜御叱有之、以
後家業格別ニ出情之様子ニも無御座、医学館へも
出席ハ仕候へ共、誠ニ申訳一通り之趣ニ而、一体
性質懦弱ニ而憤激之志無之、勝手向も至而不如意
にて困窮至極仕罷在、旁療用も甚稀ナル趣ニ御座
候。乍併近来行跡之儀ハ悪敷風説等承不申候。

大膳亮良俊

右良俊儀、実兄林良栄手前ニ罷在候内^内、家業
(5b) 出情仕候処、良栄儀勝手向甚不如意ニ付、
実伯母登受院世話仕、浅草辺町宅為仕、療治修業
仕、医学館へも無懈怠出席仕候ニ付、当時被下御

薬調合為相勤申候。右之通學術共出情仕、且人物も篤実ニ而、逐々御用立可申哉ニ奉存候。以上。

申三月 多紀安長

十七日 摂津守殿江上ル。

⑤吐乳病の乳児に対する治療法についての臨床試験に関して

吐乳病児治療の儀御請書 (6a)

小児吐乳之病証ニ、清涼瀉下之劑或ハ紫円杯用候而効を取り候儀多候哉。又ハ温補之薬劑ニ而効を取り候方多く候哉。右二端之所、當時有名之小児医柴田元養・柴田玄徳・印牧玄順之類、其外、補を専ラ用候流儀之者と瀉を専ラ用候流儀之者と、老医江病児五人又ハ十人宛も双方療治為仕、何之方効多有之哉之処、於医学館御試被仰付候而は如何可有之哉、存寄之程可申上旨被仰聞、御請左ニ奉申上候。

一 小児吐乳之証ニ数端有之候へ共、先大抵は虚実之 (6b) 二途ニ御座候。胎元より胃陽不足ニ而、乳滯を尅化仕下部江消導仕兼、上逆吐嘔仕候も有之候へ共、多くハ胎毒腸胃之間に隠伏仕、穢毒乳汁を拒ミ乳汁を尅化不仕、或ハ頑涎滯痰となり、胸膈胃脘に聚り、乳汁反吐仕又ハ乳滯過度仕、乳癖を結び新乳を拒ミ吐候も有之。先ハ世上ニは実証多き方ニ御座候。増而医学館江出候者共ハ、尽く下賤之者共之小児故、尊貴之小児トハ違ヒ稟賦も自然と壮実なる方多く候間、於医学館御試被仰付候ハ、清涼瀉下之劑を用ヒ効を取り候方多可有御座哉ニ奉存候。乍併何れにも乍 (7a) 恐御仁政之御一端ニも可有御座候間、右御試被仰付候方可然御儀ニ奉存候。

一 補劑瀉劑と双方に分、治療為仕候儀如何可有之哉。柴田元養・元徳儀、清涼攻撃を用候儀得手にて、吐乳驚癩之症にハ一概に涼膈散之類、并ニ紫円専ラに用候。右ハ京都ニ吉益周助と申候者、世ニ古方家と唱候て、万病一毒と仕、病因之差別無之、見証を以て諸病に攻撃を用、別而紫円を多く使ヒ候流儀御座候。元養・元徳共、柴田家之流儀ハ平穩成ル療治方ニ御座候処、近来右古方家を全ク採用候ニハ無 (7b) 御座候へ共、虚実寒熱に拘り不申、見証を以て一途に攻撃を用候趣ニ御座

候。印牧玄順儀も随分紫円杯氣丈に用候へ共、全ク瀉劑家と申ニも無御座、峻補之劑をも用候趣ニ御座候。小普請御医師之内、吉田玄長杯、懶惰成ル者ニハ御座候へ共、亡父桃源院之家学を受ケ、療治之上ニハ心を用、寒熱攻補共偏執無之取用候様子ニ御座候。又村上良安杯、当時手広ク療治仕、承氣紫円之類用候へ共、又温補をも用申候。是亦偏執不仕候。奥御医師之内ニハ、山添熙春院ハ紫円杯用候儀も不仕、又各別ニ補劑を用候ニ而も無御座、専ラ (8a) 輕緩中治を主ト仕、其外篠崎朴庵・木村玄長ハ清涼攻撃、紫円之類多用候へ共、又時宜ニ依リ峻補之劑をも用申候。小野西育・岡了節ハ先補を多く用候方ニハ御座候へ共、是亦時宜ニ依リ候而ハ紫円・万億丸之類も用申候。此外ハ多く清涼之輕劑中治専ト仕候者共ニ御座候。右之通ニ御座候間、元養・元徳兩人ニ対シ候程ニ温補斗リ専ラニ用候流儀之者ハ無御座候。吐乳之証にも攻撃に宜キ証有之、又温補に宜も有之、又攻補ニ拘り不申中治ニ從ヒ消痰消食、降氣驅蟲、平穩之劑にて宜も有之候間、瀉劑補 (8b) 劑と双方之分無御座、吐乳療治仕候上、何れにても治療仕候而効多有之候を良工と御定被成候方可然哉ニ奉存候。

一 右之趣弥被仰出候ハ、町方江小児初生方二三歳迄吐乳ニ而難儀仕候者有之候ハ、医学館江願出、療治受之候様御触流有之、右病児召連医学館江罷出候ハ、私共診察仕、病体・脈腹之様子委細ニ記録仕置候上、兼而療治仕候医師名面ニ次第立置候而、医学館方印紙を願出候者江相渡、其医師之宅江持參仕診察を受ケ療治仕遣候ハ、右医案之大概 (9a)・薬方委細ニ認メ、医学館迄差越候様ニ仕、其後右病児其受持医師之宅江度々罷越様子ヲ見せ、又医学館へも寄々罷出、私共へも容子為見、薬之相当不相当を相考、病之劇愈を試候上ニ而、或ハ一月ニ一度、又ハ兩月ニ壹度ツ、も委細ニ処療之趣申上候様可仕候。大抵二年又ハ三ヶ年と年限御定御座候方可然奉存候。右ハ医学館被下御薬種之方ニ而ハ調合差跨キ都合不宜候間、矢張り銘々之宅ニ而薬合せ遣し、薬服数相糺置、年末に至リ王朗ハ、薬種料御手充被下置候方可然哉ニ奉存候。弥 (9b) 被仰出候御儀ニ御座候

ハハ、猶逐一可奉伺候。以上。

申五月 多紀安長
十五日、摂津守殿江上ル。

⑥褐色白斑の獣皮の鑑別について

皮之儀御請書

褐色白斑之獣皮拝見仕候処、左之品ニ御座候。

ヲレン 魯西亜国語

ツナカヒ カラフト方言

麋 爾雅

駝鹿 沈存中筆談

馴鹿 乾隆御製集

堪打漢 盛京通志

堪達爾汗 夜譚隨録

右之趣、栗本瑞見・桂川甫周、并小野蘭山申候。且(10a)先年、魯西亜江漂流仕候儀吉江も為見候処、ヲレンに相違無御座、尤ヲレンにハ毛色種々有之、山中并人家にも多畜置キ、魯西亜東辺之諸蛮ハ尽く裘ニ仕着服仕候旨申候。カラフト方出品とハ毛並相違仕候様にも御座候へ共、風土之差にて少々之異同は可有御座哉ニ奉存候。以上。

申五月 多紀安長
十八日、長谷川弥左衛門ヲ以て伊豆守殿江上ル。
(10b)

⑦佐藤祐仙・景南父子、および宇佐美通茂・通義父子に対する評価

佐藤祐仙

右祐仙儀、治術格別抜群と申程にも無御座、又療用広く仕候と申程にも無御座候へ共、随分家業向出情仕、奥御奉公二十一年出情相勤申候。一昨午年病氣ニ付、奉願奥御奉公御免被仰付候。以後も兎角病氣同遍ニ而、始終引込罷在候。行状等悪敷風説承及不申候。

祐仙倅 佐藤景南(11a)

右景南儀、先達も申上候通、年若ニハ御座候へ共、家業出情仕、当時小石川養生所出役無懈怠相勤罷在候。性質温厚ニ而、行状等是亦悪敷風説承及不申候。

申四月 多紀安長
十日、備前守殿江上ル(11b)。

甲府勤番 松平伯耆守支配 宇佐美通茂
右通茂儀、若年方医学出情仕、詩文杯も相応ニハ出来仕、甲府御医師之内ニハ第一之学医ト申候程ニ御座候由。乍併一体甚多病ニテ、療用推張り勤候儀は不仕候。人物悪敷風説等無御座、先年甲府勤番御医師御叱之節も右之者ハ洩レ候趣ニ御座候。

通茂養子 宇佐美通義(12a)

右通義儀、最早壯年ニ而、当時医学并治療之儀、殊之外出情相勤罷在候由ニ御座候。悪敷風説等聊無之候由、承及申候。

申閏四月 多紀安長
廿日、出雲守殿江上ル(12b)。

⑧石坂宗哲への御目見と御褒美の申請

小普請御医師 御目見以下 高五人扶持 石坂宗哲
右宗哲儀、此度従甲府表被召歸、難有仕合奉存候。然ル処、去辰年甲府医師針術取立被仰付候節、永寿院儀、右之者御目見被仰付被下置候様奉願候処、逐而歸府之上ニ而可及御沙汰旨御内意御座候。依之何卒可罷成候ハハ、出情之規模にも御座候間、此節以御序(13a)御目見被仰付候様仕度奉願候。且又数年他国住居仕、針術取立之儀ニ付、講書其外手術之儀共彼は甚骨折、針科医師数人取立候趣ニ付、何卒相応之御褒美被成下候様仕度、是亦奉願候。以上。

申閏四月 多紀安長
十九日、長谷川弥左衛門ヲ以て摂津守殿江上ル。
御目見被仰付、御褒美ハ御沙汰無之(13b)。

⑨上野国甘楽郡黒岩村より出土した獣骨の鑑別について

上野国甘楽郡黒岩村方出候角骨之儀申上候書付
上野国甘楽郡黒岩村方出候骨角之儀、桂川甫周蛮説ニ原ツキ候考至而精博ニ而、私儀別段異見無御座候。小野蘭山ハ麋之趣ニ考候。是亦可然哉ニ奉存候。乍去、角之様子疑敷御座候ニ付、先年魯西亜江漂流仕候儀吉江、最初ツナカヒ之角を為見候処、無相違ヲレン之角ニ候旨申候。次に右之角を為見候処、ヶ様成角有之候獣は一切見受候儀無御座、ヲレンハ山中にも人家にも多ク(14a)有之、

角之大サ四五尺斗も有之候をも度々目撃仕候へ共、角之形大抵一樣ニ御座候旨申聞候。左様ニ御座候へハ、槌ニヲレン共難定、又麋ニ大角有之候説は御座候へ共、角之形委細ニ載置不申候へハ、是亦麋共難極奉存候。享保中、丹羽正伯、日光山之奥白根に於て溪を隔て大き馬之如く大角を戴候獸を見候由、増補庶物類纂ニ記置申候。左ニ御座候へハ、上野辺ニも深山窮谷之内ニは常（14b）に人目に触さる異獸も有之間敷哉も難斗奉存候。乍併何れ麋鹿、^{ツレ}堪打漢^{レン}之類にハ相違可有御座奉存候。龍骨ハ石ニ化し候を用候儀ニ御座候処、此骨火ニ焼き候へハ腥臭有之故、薬品中、龍骨之用ニは相立不申候。以上。

申五月 多紀安長

廿日、摂津守殿江上ル（15a）。

⑩岡井運南・立齋父子、畠山玉隆に対する評価

岡井運南

右運南、去亥年御咎以後、各別悪敷風説モ無御座候へ共、又志を改メ相助候様子も無御座、医学館へも折々出席ハ仕候へ共勉強之趣相見不申、兎角、誹諧杯之様成ル儀を相楽、療治も稀なる趣ニ承及申候。

運南倅 岡井立齋

右立齋儀、家業向出情仕候哉之趣ニ相見候（15b）得共、未年若にて格別才氣有之候様ニも相見不申、逐々如何可有御座哉、医学館へも定日無懈怠出席仕候へ共、駈ト相分不申候。乍去人物之儀、悪敷風説承及不申候。

畠山玉隆

右玉隆儀、家業向出情可仕心底ニは御座候へ共、勝手向至而不如意ニ而、年中多分引込罷在候ニ付、山崎宗運杯彼是世話も仕遣候へ共、手届兼候仕合、無抛医学館へも闕席多、誠ニ無餘儀不出情ニ（16a）相成候趣ニ御座候。一体人物ハ情弱成ル方ニは御座候へ共、行状等悪敷風説等承及不申候。

申五月 多紀安長

廿二日、出雲守殿江上ル。

⑪外科の表番医師の候補者に関する評価

御番外科御入人有之候ニ付、御尋之者共、左ニ申

上候。

瑞玄倅 古田察玄

右察玄儀、年若ニは御座候へ共、一体甚才子ニ而（16b）、學術共殊之外出情仕、当時小石川養生所相勤罷在、病人共氣受も宜旨承及申候。

以仙倅 鹿倉仙庵

右仙庵儀、餘程年輩ニ而家業出情仕罷在候。人物も随分篤実ニ而悪敷風説等承及不申候。

溝口相模守支配 小崎三省

右三省儀、人物悪敷風説ハ承及不申候へ共、多病ニ而久々廢人同様ニ御座候所、一兩年以来快復仕、少々病用も相勤候趣ニ御座候。医学館へハ出席（17a）間遠ニ付、治療手段之程駈ト相分不申候。乍併格別出情仕修行仕候ニは承及不申候。

室賀老岐守支配 西玄長

右玄長儀、一体不才ニ而御座候へ共、治療之儀は家伝之趣相心得罷在候哉ニ奉存候。医学館へも出席間遠に付、駈ト相分兼候。行状悪敷風説承及不申候。

伯典倅 関本伯玄（17b）

右伯玄儀、医学館へも出情仕相詰、才氣有之、逐々御用立可申哉ニ御座候へ共、当時八年若ニ付、治術之程未駈ト不仕候。人物之儀ハ悪敷風説承及不申候。

申五月 多紀安長 山本宗英 吉田快庵 千田玄知
晦日、出雲守殿江上ル。

⑫甲府勤番外科村山自白を表番医師に推挙する件

甲府勤番外科 村山自白（18a）

右自白儀、年頃五十才許ニも罷成候由。学問は格別無御座候へ共、家業殊之外出情仕、金瘡療治杯大抵手際宜キ旨。養子伯元儀も年頃貳拾四五才ニも罷成候処、甚才子ニ而、是亦家業殊之外出情仕候へ共、辺鄙之儀故聞見を広メ候儀無之段相嘆キ罷在候由ニ御座候。父子共人物も宜旨承及申候。先年、瀧野玄寿も甲府方被為召、御番医師被仰付候近例も御座候間、何卒右自白儀此度御番外科被

仰付候様仕(18b)度奉存候。隔り候儀ニ而誠ニ伝聞ヲ以て申上候儀ニ付、如何可有御座哉候へ共、若右之通被仰付被下置候へハ、遠国御医師一同難有奉存、此上相勵候儀ニ付、此段奉存候。以上。

申五月 多紀安長 山本宗英 吉田快庵 千田玄知 晦日、出雲守殿江上ル(19a)。

書面之趣長崎奉行江可
申遣旨被仰渡、奉承知候。
申五月晦日 中川飛驒守

書面之趣長崎奉行江被仰渡旨、奉得其意候。
申六月十六日 多紀安長
唐医戴思九之儀御請書 多紀安長

⑬長崎唐館の清国医戴思九と長崎在住の多紀門人との対談の申請

唐医戴思九と申者、此前辰年十七年以前方長崎ニ在館仕、下僕を交代之度々ニ唐山江遣シ薬材取寄せ、於館内医業を仕、并薬種売買仕罷在候旨。右之者一体日本を好之由。格別医術宜ト申候儀ニは無之趣。中川飛驒守を相煩、医案取寄一覽仕候。乍併医書之上杯ニは手近キ事却而相分不申儀も有之、且御製薬所御薬種筋之儀ニは相尋候ハ、宜儀も可有之候ニ付、御当地江被召寄、日本住居被仰付候而は如何可有御座哉之段、撰津守殿江口述仕候。翌廿三日早速右之趣、伊豆守殿江御談之趣、左之趣被仰聞候(19b)

唐医戴思九之儀申上候趣、先私弟子共之中成リ共、長崎辺遊学も致し度者有之候ハ、差遣可申、館内出入之儀は御声掛り可被成下候間、右戴思九江対談仕、如何程之者ニ候哉之所試候様被仰聞、奉承知候。然る趣、弟子共之中何レも仕官又ハ療用相持罷在候者斗リニ而、差当り遠国可仕者無御座候。依之私弟子西原長允と申者、長崎出生ニ而先年出府仕私江入門仕、当時彼地ニ而施薬医相勤、受用銀をも頂戴仕罷在候。先一通り右之者江以書状医学治療(20a)之儀ニ付相尋候筋合巨細ニ申遣、問答之趣、其外一体人物之様子迄認メ差越候様可仕哉ニ奉存候。左様ニ御座候へハ路費失墜も無之、格別事立不申相分可申哉ニ奉存候。右之趣ニ而可然御儀ニ御座候ハ、長允儀館内江罷越、戴思九江対話仕候様、御免被成下候様仕度奉願候。若右之通被仰付、長崎奉行江御達御座候ハ、早速長允方江書状ヲ以て申遣候様可仕候。以上。

申五月

廿九日、撰津守殿江上ル(20b)。

附録、長崎奉行方西原長允江差遣候書付
八月廿八日肥田豊後守宅方長允書状差越、右之内ニ認下シ候。

当時在館之唐医戴思九、医術功者之旨、御医師多紀安長及承、伊豆守殿江申上候由之趣、弟子共之内、長崎辺遊学好候(21a)有之候ハ、差越対話為致、試候様被仰渡候趣、当時弟子共之内可相越もの無之趣、幸当地医師西原長允儀ハ、先年致出府安長弟子筋ニ付、右之者対話為致度旨、安長申立候書面、五月晦日御同人堀田撰津守殿江御渡被成、長允館内江差遣対話為致候儀ハ苦かる間敷哉ニ候間、当地江申越候様撰津守殿被仰聞候由、中川飛驒守方申来候。勿論右対話問答之儀ハ(21b)、長允江安長方以書状委細可申越旨ニ付、右之趣其方共令承知、長允并唐人共通事共へも館内江罷越、唐医対話之節者通事共立合候様可為致候。

申七月

⑭竹内玄郁の急養子となる町医師野川玄徳に課した試験の結果について

竹内玄郁急養子願候ニ付御尋

町医師野川玄杏惣領 野川玄徳

右玄徳儀、於医学館考試仕候趣、別番之通ニ而、家業之儀大抵相応ニ相心得罷在候哉ニ御座候。逐々(22a)修行仕候ハ、年若ニも御座候間、上達仕、御用立候様ニ相成可申哉ニ奉存候。人柄之儀、一旦遊興ニ耽り候ニ付、父玄杏儀暫之間在方江差遣置候由。近頃は取締り家業出情仕篤実成ル趣ニ相聞申候。其外悪敷風説等承及不申候。

申六月 多紀安長 山本宗英 吉田快庵 千田玄知
十四日、兵部少輔殿

野川玄徳考試仕候趣、左之通ニ御座候(22b)

一 乾湿霍乱之辨如何。

吐瀉無キハ乾霍乱，吐下之劑を用候。卒暴ニ吐瀉者は湿霍乱，回陽之劑用候。

此答相当ニ御座候。

一 麻黄湯・桂枝湯之辨如何。

有汗発熱者，属虚，桂枝湯。無汗惡寒甚者ハ属実，麻黄湯。

此答相当ニ御座候。

一 痛風・脚氣之辨如何 (23a)。

脚氣ハ腰脚軟痛，大防風湯・越婢湯之類。痛風ハ走注して痛む。疎経活血湯之類。二証病因弁別不仕候。

此答曖ト不仕候。脚氣・痛風之辨ハ簡略ニ候。

一 敗毒散・藿香正氣之辨別如何。

四時不正之氣ニ感シ夾湿邪者，用藿香正氣散。瘡家発熱者，用敗毒散。

此答先大抵ニ候。

一 痢病虚実之事 (23b)

裏急後重甚ク，食氣も有之，脈状有力者を為実，温疫論之積芍順氣湯，或承氣湯。虚痢ハ參附ヲ用ル事も有之候へ共，難治之証と存候。虚之輕症ニハ芍薬湯・黄芩湯之類。大便赤者为熱，白者为湿。

此答宜候。乍然，虚之輕ニ芍薬湯・黄芩湯を用候儀ハ不相当ニ候。湿と熱とを赤白にて分ケ候も杜撰ニ候。

右之通ニ御座候。

申六月 多紀安長 山本宗英 吉田快庵 千田玄知
(24a)

⑮御広敷廻り担当の医師を新たに任命することに 関する意見書

御広敷廻り御医師之儀申上候書付

多紀安長

御広敷御番医師之儀，去辰年父永寿院申上候処，新規之事故不相成候。乍去御広敷廻りと申候名目ニ而致方有之間敷哉，得ト工夫致し尚又書面ニ仕差出可申旨被仰渡候。其後永寿院儀，逐々病氣相募引込申候間，不及其儀候。依之永寿院工夫之趣ヲ以て猶又相考，左ニ奉申上候。

一 当時御広敷廻りと申候本勤之本道五人程も御座候。右之内御抜挿有之，其上江小児科・外科・

針 (24b) 科・口科を御添，都合十人斗りニ而急度当番と申ニ而も無之，日々申合せ老人一月ニ五六度宛，病用之都合ニも依り可申候へ共，大抵昼頃方七時頃迄も相詰候様ニ被仰付候方可然哉ニ奉存候。尤右御医師詰合不申内，差掛候病用は詰合奥御医師相心得候様可仕候。

一 女中之方江，此度御広敷廻り御医師格別之御撰を以て被仰付候間，病人之分可成丈は右御医師療用受之可申旨被仰渡御座候様仕度奉存候。左様ニ無之候ハ、若シ折角被仰付候而も矢張り是迄之通り私共江斗り葉貫ヒ候而，御広敷廻りハ不用ニ相成可申哉ニ (25a) 奉存候。

但女中病用有之候節，相廻り診察之儀申込候へハ，其向々江病人被申入，夫方診察之席迄出候間，殊之外相待候事長，甚迷惑仕候儀，毎度私共ニも有之候。何卒若此度御改定被仰出候ハ、左様之儀無之，成丈手間取不申診察相成候様，御声掛御座候様仕度奉存候。

一 御広敷廻り御医師，女中病用相違候へハ，少も重立候女中之分は十人ニ七八人は銘々謝儀相応ニ有之候へ共，輕き女中は其儀無御座候。是は左も可有御 (25b) 座儀ニ候。乍去右様之病用多ク相違シ施薬同様ニ相成候而は，別段御手充も無之御医師迷惑ニ及可申候間，何卒少分ニ而も御上被下物御座候仕度奉存候。右は永寿院儀御広敷廻り相勤罷在候内，蓮光院様御本丸ニ被為入候節，御附輕キ女中多療治仕遣候年は，其暮從蓮光院様銀子被下置候儀も御座候間，何卒輕キ者多ク療治仕遣候節は，右之御振合ヲ以て被下物御座候様仕度奉存候。左様ニ御座候 (26a) 得は，別而難有相励精勤可仕哉ニ奉存候。以上。

申六月 多紀安長

同添書 当時御広敷廻り相勤罷在候御医師之儀奉申上候。

河野松庵 渡部立軒

右兩人は奥詰御医師相勤候内方女中病用相違，引続キ当時病用甚稀ニ御座候へ共，折々相廻り申候 (26b)。

数原通玄 峯岸春庵

右兩人は最初御広敷廻り相勤候へ共，當時は奥詰

ニ而、御製葉所掛リニ付、御広敷へハ五節句杯ニ罷出候斗ニ而、病用ハ無之趣ニ御座候。

内田玄勝

右玄勝儀は五節句杯ニは相廻り候へ共、一向ニ病用無御座候。

吉田元卓 林良栄 (27a)

右元卓儀は至而稀ニ出申候。良栄儀は絶て出不申候。尤病氣ニ而引込居申候。出勤之内も病用は無御座候。

高麗雲祥

右雲祥儀は五節句杯之外少々ハ病用も有之、折々相廻り候儀も御座候。

増田寿徳

右寿徳儀は針科ニ而相応ニ病用有之、日々も相廻り出情仕相勤申候。

御目見医師 井上宗隆 (27b)

右宗隆儀は先年表使菊野と申候者願ニ依て御広敷廻り被仰付候。其後少々、病用有之候所、近年は右菊野下宿仕、自然ト病用も減シ、當時は甚間遠ニ相廻り候様子ニ御座候。

右之通ニ御座候間、若御改定被仰出候御儀ニも候ハ、是迄相勤候者共之内ニは本勤仕可然哉之者は甚少ク可有御座奉存候。依之家業出精、人物篤実成ル者を御撰、新規御広敷廻り被仰付、御黜陟御座候様仕度奉存候。一体、御医師ニは階級少ク御座候ニ付、別紙之趣、御広敷廻り是迄と違ヒ(28a)御上之御撰ニ而被仰付候勤柄ニ相成候へハ、一統之進ニ相成り難有御儀ニ奉存候。以上。

申六月 多紀安長

附、御広式御医師之事申上候書付 多紀永寿院
寛政八辰年十二月三日撰津守殿江上ル。

御医師御手充、近来段々御改正御座候而御仕法全備仕、此上之御善政は有之間敷奉存候。然ル処、今以御広敷女中病人有之候節之御手充十分ニ無之様ニ奉存候。尤享保以来、御広敷廻りと申候御医師御座候得共、当時之趣駈と不仕候。此儀も先達而申上置候へ共、甚御繁多之儀今以御沙汰無御座候故、猶又左ニ(28b)委細奉申上候。古来方御表ニは御番医師有之、諸役人急卒之御備ニ御座候

而、難有御事ニ奉存候。左候へは女中ニも御手充可有之筈かと奉存候処、一向ニ此儀無御座候故、何卒御広敷御番医師と申候者を被仰付、昼夜明キ不申候様、老人宛相詰罷在候て可然哉ニ奉存候。

一 右之趣ニ被仰付候へハ二ツ之益有之候。第一ニは御仁政ニ可有之奉存候。第二ニは一体人物宜、出精仕候御医師共、學術は宜とも難申不才之者、格別ニ御誉有之候程ニは無之候得共出精は仕候者杯、当時仕方無御座候ヶ様之者杯、右御広敷御番医師ニ被仰付候ハ、出精之御誉自然ニ相立規模ニ相成候故、殊之外外々之者共励ニ(29a)相成申候。勿論先御広敷為勤様子を見斗ヒ、存之外治術宜候ハ、升進被仰付候方、尚々可然奉存候。

一 近キ頃ハ御広敷ニ方々様被為入候事故、一体御人も殖候内、御乳持之女大勢罷在候而、皆々小兒を召連罷在候。此小兒日夜兎哉角と申候事共有之候。奥医師詰切居候へ共、是は御用多ニ而間に合兼候間、右御広敷御番相勤候者之内へハ御小兒科杯も被差置候而可然哉ニ奉存候。

一 右御広敷御番医師被仰付候ハ、何も別段ニ御入用相掛り候筋とハ不奉存候。矢張り御表之御番医師御手充之御振合ニ而可然哉ニ奉存候。尤御表御番医師は式百俵内ニ候へハ、御足高被下置候へ共、並高式百俵ニ候(29b)得ハ、何も別段ニ被下物は無之候。依之唯御広敷江御番相勤可申旨被仰付候迄之御儀かと奉存候。

一 是迄御広敷廻り御医師と申候者有之候得共、是ハ元來女中宿小屋ニ而掛り候而、病氣全快仕候而上り候得は、右宿ニ而掛り候医師適薬ニ候間、右医師ニ引続キ薬用仕度、御広敷廻りを願來候事之様ニ承知仕候。然ル処、近来ハ小普請ニ而も御広敷廻り被仰付候得は直ニ寄合ニ被仰付候先格故、小普請御医師我レ勝ニ御広敷廻りを願罷在、奥女中縁有之候者ハ勿論、左無之候得は色々縁を相求メ女中を相頼、女中より申立候事ニ相成候故、唯今之趣ハ御広敷廻り被仰付、寄合罷成月並五節句ニ罷出候迄ニ而、病用達シ候御広敷廻り之御(30a)医師ハ八九人之内、僅三四人も可有之哉、其外ハ病用有之候者ハ相見へ不申候。ヶ様ニ而は実用ニ相立不申候。誠ニ虚名之者共ニ御座候。尤是ニも仔細有之候事ニ候。女中病用ニ而御

広敷江出候而も、殊之外相待候儀多ク候故、外病用出来兼候故、いつとなく出方間遠ニ成行候。亦女中之方ニ而は、出方間遠ニ候故頼敷からす存込候而、詰合之奥医師江頼候之様ニ罷成、唯今ハ奥医師斗ニ而女中病用仕罷在候。重立候女中ハ左も可有之哉ニ候へ共、長局之又者・下女・半女・飯焚女之類、御乳持之小兒迄も夥敷、右之奥医師江頼候様ニ成り、殊之外迷惑仕候。右之趣ニ奥医師江頼候得は、御用有之候者共之事故、乍存籠末ニも相成、本意を失シ候事ニ御座候 (30b)。

一 右之趣ニ御座候処、御広敷御番医師と申候者を被仰付候得は、銘々之御役ニ罷成候事故、相詰候時刻ニは急度罷出候得は、諸方共ニ手も届キ軽キ者共迄も十分加養も相成候様ニ相成候。御表諸役人は皆当番之者斗リニ而候得共、女中之儀ハ長局住居ニ而居リ附候事故、別而右御手充被仰付候方ニも可有之哉ニ奉存候。以上。

十二月 多紀永寿院

此書付、摂津守殿江出候処、新規之事故不相成候。乍去御広敷廻りと申候名目ニ而いたし方有之間敷哉、得と工夫いたし、尚又致書面候て差出可申旨被仰渡候。辰十二月五日御下ケ

右三通書付、申六月廿五日、摂津守殿江差上候処、奥江拘り候 (31a) 儀故、御用掛りへ見せ候上、差出可被申旨被仰聞候ニ付、頭取大嶋伊豫守を以て同廿六日御用掛り衆江掛御目、同月晦日相濟、直ニ表向摂津守殿江差上候。

御広敷廻り御医師之儀、御番医師ニ而掛持ニ致候而は如何可有之哉之旨御尋御座候。随分左様ニ而も相濟可申儀ニは御座候へ共、以前方御広敷廻りハ寄合席ニ而勤来り候場所ニも有之、且永寿院申上候通り当時も至而出情は仕候へ共、格別抜群と申候程ニ無之者共年久御番相勤居候而、甚朽腐仕罷在候者共も有之、又小普請御医師之内ニも (31b) 逐々出情仕、御番相勤可然哉之者共も出来仕候ニ付、旁以何卒申上候通り御広敷廻り御医師被仰付候様仕度奉存候。少々ニ而も階級付キ候へハ一統引立、殊之外難有奉存候間、幾重ニも罷成御儀ニ御座候ハ、此段奉願候。

一 御広敷廻り詰所之儀、是迄は番之頭部屋之内偏脇ニ御座候。先年、永寿院杯御広敷廻り数年相

勤、大抵日々之様ニ右御場所江相詰、森雲禎・河野松庵杯一同病用多取扱申候。以前は右之通ニ御座候得共、当時之御振合ニ而は左様ニも相成兼可申哉。左 (32a) 候へハ別段詰所無之候而は相成間敷哉ニ御座候へ共、御広敷御口向至而手狭ニ御座候間、如何可有之哉。乍併、去冬迄淑姫様御用人相詰候二階ニ小部屋有之、当時ハ御用有之節ハ番之頭書役之方ニも相用、又私共大勢御広敷江相詰候節ハ奥御医師之方ニ而も用候、何れ共方付不申、長ク五畳程も敷キ候部屋有之候。右之御場所杯可然哉ニ御座候。一体、以前私共部屋之下ニ十畳敷斗リ之所一間御座候而、右之御場所ニ而番之頭書役御用取調仕候処、一昨年御修覆 (32b) 之節、御場所入口付敷台等も出来仕、御長持杯出入之御廊下之様ニ相成り候。然る処、先達町医師共御広敷江出候節、右入口ノ切りニ相成り、町医師詰所ニ相成り候。其外二階小部屋、私共方ニ而使候節ハ、書役御用取調ハ右之所ニ而仕候儀も御座候。御広敷廻り御医師も終日詰候ニも無之、昼之間斗リニ候へハ、右二階小部屋詰所ニ相成候而も格別御差支ハ有之間敷ニ御座候。

一 御広敷廻り御医師被仰付候へハ、毎日両三人ツ、昼御台所断入可申哉之旨、是ハ左様無之候而ハ (33a) 相濟申間敷候。以前は奥方御広敷御客前と申候而、常式御料理出候所、近来は相止候ニ付、一体是迄も日々御広敷廻り出情仕相廻り候へハ、是非左様ニ可有之筈ニ御座候間、此度新規常断ニ相成り候と申候迄之儀ニ而、実トハ以前之形同様と奉存候。仍而別段御入用ニ響キ不申儀ニは有御座間敷哉ニ奉存候。以上。

申七月 多紀安長

同月廿八日、摂津守殿被仰聞候は、御広敷廻り御番医師ニ而掛持ニ致し候而ハ如何ニ可有之候哉。入組候儀は吉左衛門へ (33b) 可申間段被仰聞候ニ付、吉左衛門江談、前文書面翌八月朔日近藤吉左衛門江相渡候。

⑩家督相続に当たり各人物の評価

以下家督。

吉田式部卿

右式部卿儀、部屋住之節は医学医術共出情仕、神

田辺ニ而町家を借り弟子共召連、貧窮之者共施薬治療等仕候処、家督以後、眼病ニ而引込申候。一体志篤く候へ共、病身ニ而家業修行之儀不任心底趣ニ相聞候。尤人物悪敷風説等承及不申候。

式部卿実子惣領 吉田大蔵卿

右大蔵卿儀、出情之様子ニ而、医学館へも時々出席(34a)仕候。乍併未若年ニ付、駈ト相分兼候。何れ人物も父同様宜相見申候。

河野松庵

右松庵儀、種姫君様御逝去ニ付寄合被仰付、以後は多病ニ而引込勝チニ御座候。乍併累代御匙相勤候家ニ付、諸家江多ク立入、右ニ付相応ニ療用も御座候。医術は駈ト不仕候へ共、人物等悪敷風説等承及不申候(34b)。

松庵実子惣領 河野良以

右良以儀、医学は駈ト不仕候へ共、療治は相応ニ仕、甚出情相励罷在候。尤医学館へも無懈怠出席仕候。人物も宜悪敷風説承及不申候。

申七月 多紀安長

晦日、摂津守殿江上ル。

⑩小石川養生所担当の医師の推挙、および小石川養生所出役医師に対する与力・肝煎の不遜を謹責此以下養生所ニ付

小普請組 室賀老岐守支配 吉田自琢

右自琢儀、実父は目黒道琢ニ而御座候。依之幼年方(35a)医学研究仕、外科儀も相応ニ相心得、殊ニ英才ニ而出情仕罷在、医学館へも無懈怠出席仕候。乍併養父自仙儀、永々病氣ニ而一向病用相勤不申候故、養家ニ附キ候病家無之候処、自琢儀年若故頼候者も稀ニ而、自然と未病用は多ク無御座候。人物至而篤実ニ而、悪敷風説承及不申候。

清水勤番頭 新見大炊頭支配 横尾道全

右道全父道益儀、外科ニは御座候へ共、本道をも仕、小日(35b)向辺ニ而は餘程流行仕候所、本道療治之方多有之候。道全儀、引続相応ニ病用相勤、出情之趣ニは御座候得共、医学館へ出席不仕候間、治術之程如何可有之哉、駈ト相分不申候。人物之儀は悪敷風説承及不申候。

西丸奥御医師 養甫倅 増山立達

右立達儀、至而英才ニ而、年来不相応ニ書籍研究仕候。治療之儀も相応ニは心得罷在候趣ニは御座候へ共、餘り若年故、医学館へ無懈怠出席仕候へ共、治術之儀は病人多く手掛ケ不申故、駈ト相分不申候。人物(36a)悪敷風説承及不申候。

申七月 多紀安長

晦日、摂津守殿江

小普請組 山口勘兵衛支配 竹内元育

右元育儀、養父元寿本郷ニ而餘程流行仕候ニ付、右病家を引受ケ相応ニは療治も仕候由ニ御座候へ共、無程病氣ニ而心気駈ト無之様子ニ罷成り候。医学館へも折々出席仕候へ共、暫之内ニ御座候間、治術等之儀儘ニ相分兼候(36b)。乍併悪敷風説承及不申候。

申七月 多紀安長

晦日、兵部少輔殿

小石川養生所之儀、与力共、出役御医師江対し同輩方年高之方にて、何と無く不遜之事共多有之由ニ御座候。右は養生所ニ附候御褒美願、御薬種願、并諸届書等之類、与力名宛ニ而町奉行所江差出候仕来りニ付、与力共自然と組頭之心持ニ相成り居候趣ニ御座候。必竟右様之心得違方不遜成ル儀共有之候儀と奉存候。然る処、此(37a)問与力共丁寧ニ相成り、諸願書届書等、以来は町奉行名当ニ而差出候様ニ致し候様ニ相成可申段、出役御医師井上玄丹江咄候旨、同人申聞候。

一 小川又右衛門儀、与力次席ニ而、養生所病人を出役御医師同様ニ取扱申候。一体肝煎と申候は、病人肝煎ニ御座候所、又右衛門儀、御医師之肝煎と心得違罷在候哉ニ而、是亦与力同様ニ甚年高く、其上我意者ニ而無礼成ル儀共有之候。且御医師病人ニ対し診察之砌、面前ニ而是等之病人愈兼候は掛り御医師術之拙キ故ニ候。得と心附可然杯、少も憚り候所無之申聞、掛り御医師赤面ニ及ヒ困入候儀杯有(37b)之。其外右ニ類し候様成ル儀、儘ニ取留候儀も無之候へ共、何ニより不申口出シ仕為困候由。又右衛門儀、医術医学共鍛錬之儀も無之候へ共、至而多辯ニ而自慢甚く、誠ニ

海内我一人と心得罷在、庸医は朝ニ仕て頭位ニ升り、良医は埋もれて郊野ニ居ル杯申類口癖の様ニ仕、訳も無之御医師を誹謗仕、自負を専一と仕、惣而狂人共可申様子ニ而、出役之御医師共一同迷惑仕候趣ニ御座候旨、近頃迄右御場所相勤候古田察玄杯申聞候。然る処、是亦此間は町奉行方厳ク申聞候筋有之哉ニ而甚折レ、少々ハ慇懃ニ相成候由、井(38a)上玄丹申聞候。

右之通ニ而、小川又右衛門儀、口頭と違ヒ臆量は至而少キ性質と相聞候。乍併御医師を軽蔑仕、其上彼は誹謗仕候儀何共心外至極ニ付、於医学館考試被仰付、学才治術之程御糺御座候様可奉願と奉存候へ共、必竟古人之申候小人忌憚無キ之類ニ而、齒牙ニ掛ケ候足ざる者と奉存候。当時之様子ニ而ハ若考試被仰付、私共問難仕候ハ、畏縮之極り病ニ而も発可申哉も難斗、是亦可憐事ニ候間、其段は不奉願候。一体之処、何も駈と取留メ候儀も無御座事ニ付、愚妄之(38b)程は御憐恕御座候様仕度奉存候。唯以来出役御医師勤悪キ様成ル儀共無之様、与力肝煎格外之儀無之様被成下候様仕度段奉願候儀ニ御座候。以上。

申八月 多紀安長

二日、摂津守殿

⑩甲府勤番頭より提出された甲府医学所に関する意見書に対する意見

甲府勤番頭兩人方甲府表医学所之儀申上候書面御下ケ被成下、私存寄可申上旨被仰渡、則右書面熟覽仕候処、一体之主意は尤至極之儀ト奉存候。猶私存寄、書面文段を以て御請左ニ奉申上候(39a)。

町医師之内ニ而も是迄彼は世話仕候者共も御座候間、右様之者江も此後医学所ニ被仰付被下候ハ、少々宛手当も致し不遣候而ハ規模も薄く、元来株も無之手薄之者共故、難渋も可仕哉ニ奉存候間、彼是入用出方無御座候而ハ難取続奉存候ニ付、可相成御儀ニ御座候ハ、為諸入用月二十五人扶持も御手当被成下候様仕度、右ヲ以て諸入用相賄申候ハ、末々無懈怠相続可仕哉ニ奉存候。

右之趣、医学所ニ被仰付候ハ、様も無御座候ハ、相済申間敷哉と奉存候。乍併右世話仕

候町医師、何程之人物ニ御座候哉、辺国之医師共打寄尊敬仕候(39b)者ニハ、存之外口頭斗リニ而學術未練之者御座候類多有之候。万一左様成ル者御手当ニ而も頂戴仕教導之任ニ備り候而ハ、却而害も可有之哉。何れ勤番頭も他事ト違ヒ素人之儀ニ而極候は無覚束儀ニ而ハ無之哉と奉存候間、弥申上候通被仰付候御儀ニ御座候ハ、右之町医者御当地江被召下、医学館ニ於て考試ニ而も被仰付、弥其任ニ当り可申哉否之程御糺御座候様仕度御儀ニ御座候。

一 当時御医師何れも出情仕候儀故、為取立申上候筋ニ而は無御座候へ共、其御地方御医師之内老人当地江被指遣、医学所取立之儀被仰付、右御場所ニ住居(40a)仕候様相成候ハ、別而規模も相立、御医師并町在之医師迄も猶無油断相勵、医業出精仕候様相成可申儀ト奉存候間、可相成は御医師老人当地江被遣候方ニ仕度奉存候。

右之趣は心得難く奉存候。町医師之内ニ而世話仕候者被仰付御手当モ被下置、又別段ニ御医師を為取立ニ而は無之、医学所取立之為メニ被差遣、右御場所ニ住居為仕置候儀は如何之主意ニ御座候哉。無油断相勵、医業出情仕候様相成可申儀と奉存候と申上候趣ニ候而ハ、医学療治之世話(40b)は町医者内江被仰付、御当地方罷越住居仕候御医師は唯医学所之仕法を立テ、御医師之出情不出情之様子を取調等仕候儀ニ而可有之哉ニ御座候。弥左様ニ御座候ハ、御医師ニ無之とも事相済可申哉ニ御座候。

右ニケ条之趣相考候。弥甲府御医師御教導被仰出候御儀ニ御座候ハ、迎も寡聞固陋之辺鄙之医師共打寄如何様ニ出情相勵候と申候而も勞して功なく、良医は出来申間敷哉ニ奉存候。依之右医学所江御当地學術相備り候御医師老人被指遣、右御場所規條相立、医書講釈、会読、療治稽古被(41a)仰付候方可然哉ニ奉存候。乍併御当地ニ而學術備候程之者は、当時夫々御用向も相勤罷在、且ハ病家も多く有之候故、三年又ハ五年も甲府ニ在勤仕候而は御差支之筋も可有之、且は当人も及難渋可

申哉ニ付、旁百日程之限りニ而四五年も被指遣候方ニも可有御座哉ニ奉存候。四五年も百日ツ、無懈怠日課ニ稽古為仕、右御医師在勤不仕ノ間ニは右御場所ニ打寄、医学治療之儀共相互ニ切磋琢磨仕、重而江戸表より御医師罷越候節は此儀を質し彼ノ理を問、此病ニは何之方か可然、相楽出情仕様ニ罷成り候ハ、甲府御医師之内ニも才氣有之候輩も有之候段承及候(41b)へハ、行々は右御医師之内方出群之者出来仕、御当地方御医師被差遣候ニ及不申候而教導出来候様罷成り可申哉ニ奉存候。尤医学所諸賭等も年々少マツ、ハ被下置、且御医師被指遣候節ハ御手当も被下置候儀ト奉存候。此等之趣、御尋ニ付、存寄不憚恐奉申上候。以上。

申八月 多紀安長
十八日、出雲守殿

⑩吉田長達著『疹科治法綱』の出版申請に関して 疹科治法綱

右は清ノ朱用汲と申者、明之王宇泰著し候証治(42a)準繩と申候書之麻疹之一門を採取仕、自分之経験諸方等を増加仕編集仕候書ニ而、麻疹治療之儀ニ付有益之事共有之、世上広く発行仕可然書ニ可有御座哉ニ奉存候。以上。

申八月 多紀安長
十一日、出雲守殿

右吉田長達板行仕度段候候ニ付、御尋。

⑪仁和寺本『医心方』の出版に関する伺書

医心方 二十冊

円融院之御宇、丹波康頼撰集。

但原本三十巻之所、残缺有之、二十冊存在仕候(42b)。

右之医書、年久ク世ニ絶候処、寛政三戌年、仁和寺宮方御取寄ニ相成り、御写之儀、私父永寿院江被仰付、同年十一月御写出来仕、奉差上候。其節下タ写シ仕候本一部は永寿院拜領仕候。右医心方之儀は本朝第一之古キ医書ニ而、唐土ニも亡失仕候医書を多く引キ集メ古代之薬方を載せ候比類無之結構成ル書ニ而御座候。依之右拜領之本ヲ以て板行申付、誠之蔵板ニ仕、書物屋共へ掛札等之儀

は不仕、篤志之輩江伝へ申度奉存候。仍而此段奉伺候。以上(43a)。

申八月 多紀安長

右御小納戸頭高嶋近江守ヲ以て伺候処、伺之通り相濟候旨高井飛驒守殿被仰渡候旨同人申聞候。同月廿日之事也。

⑫池原雲洞の医学館寄宿願について

小普請御医師 堀田主膳支配 池原雲洞

右雲琢儀、年若ニ御座候処、父雲洞多病ニ付家業向取立候儀出来兼候。右ニ付、自分賄ニ而医学館江寄宿仕修行仕度段奉願度旨申聞候。若不苦儀ニ御座候ハ、願書支配江為差出候様可仕候。依(43b)之御内意奉伺候。以上。

申八月 多紀安長
廿五日

承り付、書面伺之者難相成候。弟子之分は不苦候間、掛り御目付と相談之上、猶又伺候様被仰渡、奉得其意候。以上。 多紀安長

右承り付、布施内蔵丞江相渡ス(44a)。

⑬長崎唐館の清国医戴思九大病のため対話困難なる件

唐医戴思九江、私弟子筋之者ニ而長崎ニ罷在候西原長允儀、対話可仕旨被仰渡被下置候処、戴思九儀当時舌癰ニ而大病ニ付、当分対話之儀断候段、船主劉雲臺方申立候旨、長允方方申越候。仍而此段申上候。以上。

申九月 多紀安長

四日、摂津守殿江

多紀安長殿

中川飛驒守

長崎表在留唐館医戴思九江対話之儀ニ付、医師西原長允館内江罷越候儀、貴様御申上書面、当五月(44b)卅日松伊豆守殿御下ケ被成候付、其段肥田豊後守江申遣候処、戴思九儀先達方大病相煩、対話可致体無之打過候内、九月廿七日病死いたし候旨、豊後守方申越候。為御承知此段及御達候。十一月

廿一日請取

②③御医師はそれぞれ専門科を守りみだりに他科を侵すべきでないとする意見書

御医師科之儀申上候書付

御医師科を御立被差置候儀は、古十三科之分別有之候如く、其家業を専一ニ相研キ他念無之療治仕、彼是混雑不仕様之御主意と奉恐察候。右ニ付、私共本道仲間一同、家内之小兒又ハ貧窮ニ而業為給候儀相成兼候程之小兒は格別、小兒療治之儀ハ如何様ニ所望仕候共堅く相断、小兒科江譲り治療不仕候。然ル処（45a）、小兒科之内ニハ公然と大人療治仕候者も御座候。尤女中杯ハ何之辨も無之、巧者成ル医師ハ大人・小兒之差別は無之事ト心得療治乞候儀ニ御座候。右様之節は堅く断申聞候筈ニも可有御座哉之処、左ハ無之業遣候儀共御座候。尤大人・小兒共巧者ニハ可有御座候へ共、小兒科は小兒療治こそ専一ニ修行可仕、大人科療治之筋合は小兒を療治仕候為メ之心得ニ相学候迄之儀ニ可有之候処、大人之療治迄押張り仕候ト申候は何共難心得儀と奉存候。仍而寄々大人療治筋合之儀話合見候処、格別ニ手練之様子も無之、誠之心拍子斗にて有触レ候薬方之書物一二部を所持仕、少々六ヶ敷病人請取候へハ、右之書物を繰り薬方之功能（45b）を引合せ業遣候と申位之儀ニ而、何共軽々敷心得罷在候儀ニ而、第一御主意ニも相背キ奉恐入候儀ニ而ハ有御座間敷哉ニ奉存候。右之趣私共得と申聞候様ニ可仕哉と奉存候へ共、銘々其科を専一ニ可仕儀ハ、去辰十一月被仰出候儀ニ御座候処、右之御主意を如何相心得候哉、私共申聞候而も聞入も仕間敷、剩へ私共鄙吝之心方彼是申様ニも承込可申哉と差扣罷在候儀ニ御座候。依之其病人小兒之節方業遣、右合ニ而引続キ大人ニ至り候迄モ差遣候ト申類、又ハ折節大人科居合せ不申、差掛候病人ニ業二三服も差遣候杯申儀は格別、何卒小兒科之分は大人療（46a）治堅く相断仕不申様仕度奉存候。近来、医学館御改定被仰出厚ク御世話有之、御医師一統出情仕銘々専門を第一と相励候御時節ニ御座候へハ、別而諸科混雑不仕様仕度御儀ニ付、此段奉申上候儀ニ御座候。以上。

申九月 多紀安長
五日、平岡美濃守殿江

但右は奥女中上臈おるよ療治致し候処、伊東高益江転業ニ相成り、於御前容体御尋有之、転業之儀申上候処、甚如何敷候ニ付、其段美濃守殿江御咄申、其上右書面差上候（46b）。

〔附〕 寛政八丙辰十一月十四日撰津守殿、永寿院江御渡之御書付、左之通。

奥医師江

御医師中各専門にいたし候諸科之儀、銘々其家之起処にて、自分として転科ハ不相成儀勿論之儀ニ候。尤医術相互ニ諸科之儀博く心懸無之而ハ難成道理も可有之候得共、止処其家之専門を以御奉公をも仕、世上療治をも広く致し候儀、則あまねき御手当ニ候間（47a）、諸科之儀博く心懸候由、他科のミを専にいたし家之科ハいつとなく衰候様ニ成行候而は御主意ニも背キ候事ニ候。近来何も出精之趣ニ付而ハ、右之趣弥以厚く相心得可申候。

伊東高益書面ニ付、申上候書付 多紀安長

伊東高益書面、甚巨細ニ相認メ至極道理に叶ヒ候哉ニ書取り候へ共、私愚按を以て相考候処、巧に詞を飾り筆を振ヒ、其極意之程ハ一々自分之勝手を第一（47b）仕候哉ニ奉存候。万々右之通ニ相成候而ハ、御上古来方之御主意ニも相背キ、医家古来方之定則にも戻り、初心より大人小兒と打交り療治仕候へハいつとなく混雑仕、大人科に転し可申も難斗候。小兒療治仕候ニハ大人科も手掛不申候へハ治術之道理難明筋も有之候事ニ候へハ、右は下男下女惣而貧賤之病者ニ而致し覺可然事ニ而、御旗本其外ニ而押張り大人を相兼療治仕候而は、人ニも依り可申候へ共、中才以下之医師は多岐に相成、自然と専門之方精熟仕兼候は必定之勢と奉存候。且利潤之方に走り候ハ人情之習候処、大人科ニハ大名衆病氣ニ而滞府仕、并隠居奉願候節杯は、是非共御（48a）医師相頼候儀故、自然と収納も小兒科より多キ方ニ候へハ、兎角に大人相兼申度底意之者も有之哉ニ御座候。乍併當時も一切大人療治相断、専一ニ小兒斗り世上手広仕、身上其外大人科にまさり胖に暮し居候者も御座候へハ、あなかちに科を兼候とて手広く療用出来候と申ニ而は無之、只銘々之志に在之候儀ニ而

御座候。累代之小児科故、専門を一途に守り大人療治堅く相断、小児斗り仕候と世上江申唱、其上にて頼来候者無之は其身之不幸ニ而仕方無御座候へ共、御上江対し奉り先祖江対し候而之申訳は相立可申儀ニ御座候。又一途ニ専門を守り志を堅固に研究仕候へハ、大人之療治ハ断不仕候とも世上ニ小児斗りも沢山ニ有之候へハ(48b)、随分十分ニ療用出来可申、右上達仕候上ハイや共世上も手広ニ相成り、御上之御見出ニも預り不申は無之儀ニ御座候。且高益書面之内ニ、初生之小児疳病之小児杯大人と違ヒ扱方有之而已、其餘多分大人病ニ違候事無之、薬方も多分同様ニ而大人は大剤ニ調合仕、小児は小剤ニ調合仕候而已ニ御座候之旨認メ候へ共、仲々小児と大人と之違ヒは右斗り之儀ニ而は無之、急驚風・慢驚風・脾風・慢肝風之類は申上候ニ不及、同じ欬嗽にも小児に限り有之候頓欬嗽驚と嘔、泄瀉にも瀉瀉杯申類にて、同病にて大人とハ療治仕方違ヒ候。精く穿鑿不仕心よりハ一概に薬剤之大(49a)小而已違候と斗り弁へ罷在候哉ニ御座候へ共、誠ニ懸隔仕候病体多有之候儀ニ付、小児科ハ習業之発端より小児專一ニ取扱不申候へハ相成不申に極り候儀ニ御座候。田舎杯医者少き土地にて大人小児科を分ケ仕候而は差支候筈ニ候へ共、御膝元と申、御医師斗りも式百人ニ餘り、其上陪臣町医師無限有之候儀ニ候へハ、兼科不仕候とて如何様ニ小身成ル病家ニ而も格段差支候筋は有之間敷事ニ候。御慰之猿楽之類ニ至り候迄、仕手・脇扶夫々に家を御立被差置候ハ、其一藝を專一に可仕様之御主意と奉存候。然ルニ御番医師・寄合医師・小普請医師之内は(49b)打交り療治仕、又近頃之御規定をも御改メ、御番医師ニも小児科被仰付候様仕度杯申儀は以之外之儀と奉存候。且又官路見馴、御規定を覚候為に被仰付候方可然との儀は、大ニ心得違ニ御座候。医師は職業を以て御奉公仕候者ニ御座候へハ、官路にうとく候共随分御差支之儀は無御座候。仮令官路にうとく候共、職業之外ニ入組候動向は聊無御座、君辺ニ常ニ侍陪仕候儀ニ而も無御座、格別心痛仕候儀は無御座候。其上仲間大勢引廻し、御小納戸頭取・御膳番杯夫々掛引キ仕候儀故、小普請又ハ部屋住方一旦に奥江被召出候仲間

共も私初多有之候へ共、今日迄差扣伺候(50a)程之不調法仕候者も無御座、却而餘り官路ニ委く世間取廻シニ鍛錬仕、或は身上向巧者ニ取賄候類之医師は肝要之職業にうとき者多き方ニ御座候。其故ハ心志專一に無之儀ニ而御座候。其処ハ兼而御上ニも御目永ニ御仁恕被為在候御儀と奉恐察候。高益申上候は誠ニ申草とも可申哉。仍而去辰年専門助之為に他科をも致し候儀等ハ不苦候。夫迎も他科療治之事、一名にて公辺江名前杯出候儀ハ遠慮可仕旨、堀田摂津守殿父永寿院江被仰渡候儀ニ付、全く相兼申間敷ニ而も無御座哉ニハ御座候へ共、大奥女中療用之儀杯、格別之容体ニも無之当分引風様ニ而薬遣候類は、迎も終日御広敷ニ(50b)詰居候御小児科之為故、其請ニ任せ候も可然哉ニ候へ共、重立候女中ニ而御聴ニも入可申程之容体之病人ハ堅く相断候様仕度儀ニ奉存候。奥御医師之内ニ乱雑ニ療治仕候者有之候へ共、御上ニ而其儘ニ被差置候哉之様ニ御座候而は、表惣御医師の方ハ弥猥りに相成り候端ニ相成候哉も難斗奉存候間、幾重ニも高益相認メ候書面之趣、御取用は無之、本道・小児混雑不仕候而二科専門之差別相立候様、御勘弁被成下候様偏ニ奉願候儀ニ御座候。以上。

申十月 多紀安長

三日、平岡美濃守殿江上ル(51a)。

④村岡玄超の評価

村岡玄超

右玄超儀、格別才気は無御座候へ共、人物も篤実ニ而家業出情仕候。父孝運儀療用手広ニ仕候間、引続キ玄超儀も当時相応ニは病家取扱候由ニ御座候。其外如何敷風説等一向承り不申候。

申十月 多紀安長

七日、備前守殿

小石川養生所方御番医師被仰付候ニ付、御尋(51b)。

⑤広井宗寿・笠原養玄の法眼叙任申請

広井宗寿 笠原養玄

右兩人共、奥御医師七ヶ年相勤申候。依之可罷成御儀ニ御座候ハ、当暮法眼被仰付候様仕度奉願

候。以上。

申十一月 多紀安長 吉田快庵

十日、頭取岡村丹後守江出ス。十二月十七日兩人
法眼被仰付之（52a）。

②⑥京都医家堅田絨造の献上にかかる宋版『本事方』の鑑定

宋板本事方 六冊 内 前集十卷 後集十卷
右南宋宝祐癸丑年夏淵之余唐卿重刊之本ニ而、後
集迄相揃、至而稀世之書ニ御座候。近来、乾隆勅
撰之四庫全書提要目錄ニ、本事方十卷と斗り記録
仕、又乾隆新刊之本事方渡来仕候処、是亦前集十
卷斗りニ而御座候。依之相考候へハ、当時唐土ニ
は後集は亡佚仕候哉ニ御座候。此邦流伝之和本、
文字誤脱多御座候処、此本は甚完備仕候趣ニ相
見、彼（52b）是以て貴重可仕本と奉存候。以上。

申十一月 多紀安長

十五日、長谷川弥左衛門江渡ス。

京都町医師堅田絨造と申者、献上願候ニ付、御尋
右願之通献上被仰付、白銀弍十枚為御褒美被下之。

②⑦兼康栄順・兼康栄元の評価

兼康栄順

右栄順儀、家業相応ニ心掛、病家も餘程有之、儒
学も心得詩文杯も可也ニ出来仕候哉ニ御座候へ
共、廿歳斗之頃より遊戯に耽り、療用之外諸家江
立入候趣ニ御座候。近頃迄も少々ツ、右之沙汰承
り及候間、私儀も（53a）異見相加候ニ付、両三年
以来ハ堅く嗜ミ療用之外ハ諸家江参り不申候由ニ
御座候。此外悪敷風説承及不申候。

栄順弟 兼康栄元

右栄元儀、当申三十歳斗りニ而、近頃迄千之助と
申候而、医業を嫌ヒ俗体ニ而栄順厄介ニ相成り、
武術儒学等之心掛も無御座、是亦遊藝を相楽一生
を終り可申心得ニ罷在候所、当年ニ至り剃髮仕、
栄元と改名仕、家業相学候趣ニ御座候。妾腹男子
も有之、七八歳ニも相成り候由ニ御座候。此外悪
敷風説承及不申候。

申十一月 多紀安長

六日（53b）、右備前守殿、栄順病死ニ付御尋。

②⑧篠崎朴庵の後任の奥医師として池田瑞仙を推挙する件

奥詰御医師 痘疹科 池田瑞仙

此度篠崎朴庵病死仕候ニ付、御附老人明候間、御
入人之儀奉願候哉之旨、山添熙春院江内々相尋候
処、朴庵病死仕候而も八人ニ御座候間、御番等可
也ニ相勤可申ニ付、別段御入人ハ不奉願候旨申聞
候。依之相考候処、何卒右池田瑞仙儀、御附奥御
医師被仰付候様仕度奉存候。瑞仙儀、痘疹科ニは
御座候得共（54a）、一体痘疹と申候者は小兒の方
多ク御座候間、右専門に仕候ニは小兒一切之治
療、驚風・痢疾・疳病等迄之取扱方を心得不申候
へハ治療は相成不申候。右故御小兒科仲間と打
込、御平日泊御番相勤候ても随分小兒科同様ニ御
差掛り之御用は辨シ可申哉ニ奉存候。九月中、大
納言様御水痘之節杯、瑞仙江伺被仰付候処、奥詰
ニ而同席ニ無之故ニも候哉、御附仲間共何となく
突廻シ候様成ル振合ニ而困り候様ニ相見、聊存寄
等申出候儀は難仕様子ニ御座候。若御痘瘡之節
杯、右様ニ而ハ甚以御為ニ相成不申儀、且御平生
之（54b）御容体も繁ク奉伺得と為相心得置候様
仕度、旁以奥御医師被仰付候様仕度奉願候。以上。

申十一月 多紀安長 吉田快庵

七日、美濃守殿江

②⑨奥医師候補の推薦、および杉浦玄徳に関して

奥御医師御入人之儀申上候書付

奥御医師橋隆庵跡江御入人之儀奉願候処、可然者
共可申上旨被仰渡、則左ニ相認メ奉入御覧候。

奥詰御医師 二丸御製薬所掛り 曲直瀬養安院
申五十一才（55a）

奥詰御医師 医学館講書役 杉本仲温
申四十才

寄合御医師 医学館世話役 千田玄知
申四十一才

右之者共可然哉ニ奉存候。年若之者共之内ニは
逐々抜群之者出来可仕奉存候へ共、差当り年頃ニ
而可然者は右三人之外無御座候。以上。

申十一月 多紀安長 吉田快庵

十日、美濃守殿江（55b）

奥御医師被仰付可然哉之者共、別紙名面申上候

処、猶亦乍恐私共存念之程奉申上候。

一 曲直瀬養安院儀は年輩ニ而人柄至而貞実ニ而、御製薬所年来骨折相勤、万事取締甚宜御座候哉ニ奉存候。尤医学治療之儀厚ク心掛罷在候。乍併才氣之方ハ少々鈍ク療治辺差働キも少ク、且高禄ニ候間、初心之節方下賤之者杯頼候者も稀ニ付、自然と病人取扱方少ク手練之程駈とハ不仕候へ共、大抵ハ相心得罷在候哉ニ奉存候。一体人柄と申シ当時養安院程之者も有御座間敷哉ニ奉存候(56a)。

一 杉本仲温儀は誠ニ英才大量なる者ニ而、人柄も温順ニ医学之儀も博ク研究仕、第一療治之筋合も宜、一体先年方下賤之者共多ク手掛ケ本道療治仕、一昨午年転業被仰付候以後は御旗本杯も病用多ク、別而手柄等有之候趣ニ御座候。猶亦此上出精候ハ、如何程上達可仕哉、已ニ当時仲温程之者も有御座間敷哉ニ奉存候。

一 千田玄知儀は人柄も貞実ニ而医学も博ク研究仕、療治之儀も当時病家多ク取扱、至而出情仕罷在候。是亦逐々上達可仕哉奉存候へ共、一体之所は養安院・仲温を相兼候而一等も劣り可申哉ニ奉存候(56b)。

右之通ニ御座候間、何卒可罷成御儀ニ御座候ハ、養安院・仲温兩人奥御医師被仰付候様仕度奉願候。若右之通り被仰付候ハ、御備ニも甚宜ク、且は以御威光諸家病用も相増、弥上達之上にも上達仕、益御用立可申哉と奉存候。不願恐此段奉願候儀ニ御座候。以上。

申十一月 多紀安長 吉田快庵

十日、美濃守殿江

杉浦玄徳儀、先年奥詰當時も學術共相激、随分御用立可申者ニ御座候へ共、先年御咎も有之候ニ付、書面江も名面認載不申段、快庵一同口上ニ而美濃守殿江申上候処、其後玄徳儀御推挙可有之哉之取沙汰承り候ニ付、左之書面内々ニ而差上ル(57a)。

杉浦玄徳儀、御番医師之節、医学博ク研究仕療治巧者之旨、私父永寿院申上、寛政三亥年家業出情ニ付寄合被仰付、其後医学館御改定被仰出候節、猶又申上、山本宗英・吉田快庵一同医学館世話役

被仰付、無程奥詰被仰付候。然ル処、同四子年永寿院儀医学館取扱方之儀ニ付不正之筋共有之趣、玄徳儀医学館掛り御目付中川勘三郎江内々申聞、夫より摂津守殿へも申上候由。俄ニ抱入置候俗事取扱役兩人暇差遣可申、御家人方出役兩人引替被仰付、厳密ニ勘定等相糺御座候ニ付、永寿院儀乍恐甚御疑申上候は(57b)、是迄逐々被仰渡之趣は御内意御座候処、右様ニ俄ニ被仰出候は如何之御儀と当惑仕罷在候処、其節快庵儀右之始末を得と存シ、玄徳申上候筋有之、自分医学館之惣宰ニも相成り可申哉之底意ニ相見候趣、内々永寿院江及演説候ニ付、医学館取締方之儀、并玄徳人物六ヶ敷、日頃宿意を含罷在候筋合等巨細ニ相認メ、極御内々加納遠江守殿へ差上、摂津守殿へも差上候処、松平越中守殿御内覧有之由。玄徳儀、医学館世話役御免も可被仰付哉之御内沙汰御座候処、永寿院申上候は、奉対御上候儀ニ而は無御座、私一分之儀ニ而、又玄徳程之者も有(58a)之間敷ニ候へハ、私不正之筋無之段明白ニ相分り候上ハ別段存寄無御座、矢張り是迄之通り被召使候様奉願候段申上、右之御沙汰相止候。

但右以前、玄徳儀、永寿院江宿意有之候儀は、甚入組候儀ニ御座候。摂津守殿江差上候書面之内委細認候。事繁ク御座候へハ、相省キ申候。

御尋も御座候ハ、右書面扣入御覧候様可仕候。然る処、同丑年秋、於医学館薬品会之節、渋江長伯差出候肉桂類数品、玄徳江借候処差戻不申、度々及催促候へハ薬用ニ遣弘ヒ候旨申聞候。其外御医師所持之掛物杯借り候而返却不仕失ヒ候類も有之哉之旨、出役御徒目付・御小人目付あれ是承り出シ、委細ニ認メ密々差(58b)上候哉にて、此度之一件其儘難被差置、可惜之儀ニは候へ共御咎被仰付候段、永寿院江御内意有之、同寅三月廿四日奥詰御免、医学館江罷出御医師世話役仕候ニ及不申段被仰渡候。

右玄徳、奥詰等御免之訳合、荒増如此御座候。一体医学も博ク研究仕療治筋巧者ニ取廻シ候段も、人物奸曲ニ而不宜儀も、世上ニ存知候者多有之、別而私儀も十年餘も学友ニ而親く突合委く存罷在候。医学療治之風儀折々少々ツ、替り見識落付不申様ニは御座候へ共、近頃八年輩ニ

も相成り左様にも有之間敷哉。何れ一体医業之力は優レ候ニ相違無御座候へハ、此度(59a)奥御医師御入人被仰出候ニ付、玄德儀も可申上哉と奉存候得共、一旦被御咎候者故、恐入不奉申上候。乍併人物心底不宜処ハ御捨被置、其藝能之長ずる処を御取用被遊候御儀ニ御座候ハ、随分可然御儀ニ可有御座哉。仮令候ハ、人を讒し候類ハ、讒を被り候者之迷惑は其者一分ニ止り候へ共、品ニ依り候而は不測御為メニ不宜筋も可有之哉ニ候へハ、当時御明察之御政道ニ候へハ、仲々讒口杯之御取用も決而有之間敷ニ御座候上は、若以思召被召出候御儀ニ御座候ハ、私共毛頭異義可奉申上様ハ無御座候。乍去、先年之如ク同輩之物を借取り仕候類は、一旦被御咎候以後(59b)懲り候而前非を悔居り、若奥御医師被仰付候上は衆医之上にも立候故弥謹を加へ可申哉、又ハ衆医之上ニ居り候様ニ相成候ハ、目下之者を凌き却而又候不正之筋共有之間敷と御請合申上候儀も仕兼、且一昨辰年、目黒道琢と申候町医師医学館ニ而講書相勤候者病死仕候節、跡役無御座候ニ付薄々玄德儀を伺候処、相成ル間敷旨御沙汰ニ付、無拋杉本仲温儀を申上候仕合ニ御座候。此度奥御医師御撰拳之儀は殊更此上も無キ重キ御役にも御座候へハ、旁以差扣不奉申上候へ共、万々一父永寿院を如何敷申上候宿意を扶ミ、學術兼備之良医を退ケ大(60a)切之御為を顧ミ不申様にも被思召候而は誠以恐入候仕合ニ付、委細之儀極密々奉申上候儀ニ御座候。以上。

申十一月 多紀安長
廿四日、飛驒守殿江

去子年、医学館御改定御目論見之砌、世話役之内江杉浦玄德名面書込、家翁被差出候処、玄德儀は人物六ヶ敷右様ニ而も世話役被仰付可然哉、随分其処相弁取扱候様ニと松平越中守殿御内々被仰聞候旨、撰津守殿家殿江御申聞有之候段咄被申候。且一体玄德医学館之儀は御引受にも有之候間、十一月廿五日撰津守殿御宅江罷越、御直ニ飛驒守殿江上候書面之趣演説、其上玄德儀を委細ニ咄候者ハ快庵ニ御座候処、此度は却而玄德儀を推挙仕候

趣何共(60b)難心得、万一玄德を推挙仕医学館惣宰之儀を引受可申底意にも可有之哉。祖父以来永寿院儀も誠ニ多年粉骨砕心仕候医学館之儀、私儀不行届儀有之、重立世話役御免被仰付候儀有之候ハ、是ハ無是非御儀候へ共、万一奸計ニ中れ餘人ニ奪レ候様成儀有之候而ハ、折角以御世話相続仕、万事相整候医学館如何様ニ相成可申も難斗、何共心外至極之段御歎申上候処、尤之趣御聞被置候旨被仰聞候(61a)。

③〇医学館講師・世話役手伝・薬調合役への褒美の申請

奥御医師 栗本瑞見
桂川甫周
山崎宗運
奥詰御医師 池田瑞仙
杉本仲温

右五人、於医学館講書仕、無懈怠出席仕候ニ付、例年之通、当暮も御褒美被下置候様仕度奉願候(61b)。

寄合御医師 野間玄琢
奥御医師宗英倅 山本楊庵
奥詰御医師養安院倅 曲直瀬正雄

右三人共、於医学館御医師世話役手伝出情仕相勤候ニ付、例年之通、当暮も御褒美被下置候様仕度奉願候。以上。

申十一月 多紀安長
廿六日、撰津守殿江(62a)

京都物産者 小野蘭山

右蘭山儀、去未三月京都方被召下、於医学館講書被仰付候。以後一月二十日宛出席仕、本草綱目講業甚出情仕候。御手充ヲも被下置候儀ニ付、別段奉申上候も奉恐入候得共、老人之儀、遠国方罷出、殊ニ一席も無懈怠誠ニ皆勤ニ御座候間、何卒可罷成御儀ニ御座候ハ、薄キ御品ニ而も当暮御褒美被下置候様仕度奉願候。以上。

申十一月 多紀安長
同断(62b)

寄合御医師内蔵允倅 久志本主水

右主水儀、医学館江出席仕、被下御薬調合之儀、当暮迄ニ而五年無懈怠相勤申候。依之去去年之通リ医学館常式御入用餘金を以て取斗ヒ可申候間、白銀三枚被下置候様仕度奉願候。以上。

申十一月 多紀安長

同断

③家督相続した吉田栄全・塩田宗栄の復禄願書

小普請組 室賀老岐守支配 吉田栄全 (63a)
右栄全儀、去未冬申上候通り、一体人物篤実孝心ニ而家業も殊之外出情仕候処、父代方身上向甚不如意ニ付、修行も相成兼候仕合ニ御座候。然る処去十一月家督被仰付候節、式百五十俵之処式拾五俵被召上候ニ付、当時ニ至り候而ハ別而貧困ニ而甚難渋至極仕罷在候趣ニ付、何卒可罷成御儀ニ御座候ハ、以御憐愍復禄被仰付候様仕度奉願候。去冬御内意も御座候ニ付、此段奉申上候。

小普請組 渡部平十郎支配 塩田宗栄 (63b)
右宗栄儀、寛政三亥十月家督被仰付、本高式百俵之処、四拾俵被召上当時高百六拾俵ニ而御座候。宗栄儀、一体人物も温厚ニ而家業も出情仕候ニ付、同七卯年正月小普請金御免被仰付候。父宗真代方身上不如意之処、近年ニ至り候而誠ニ必至と差支困窮無此上も様子ニ而、医学館へも出情仕病人も多く取扱、難病も治し候而手柄有之候処、近頃は病氣申立出席成兼候仕合ニ御座候。何共可惜之至りト奉存候。先支配瀧川長門守方彼は世話も仕遣候哉ニ御座候へ共、仲々届キ兼候趣ニ御座候。依之是亦可罷成御儀ニ御座候ハ、以御憐愍復禄被 (64a) 仰付候様仕度奉願候。以上。

申十一月 多紀安長

廿六日、備前守殿

右栄全儀は餘り年数無之故、復禄難被仰付候間、一兩年過キ弥出情ニ候ハ、小普請金御免、其上ニ而復禄も可被仰付哉。宗全儀は随分願之通可被仰付候段、備前守殿被仰聞候。翌十二月五日之事也。

④奥医師候補者の追加推薦

先頃申上候三人之外、猶又出情之者、老岐守被申聞候ニ付、左之書付出ス。

御番医師 中川隆玄 申四十六

御番医師 余吾良仙 申四十九 (64b)

右兩人共、人柄治療之儀、世上広ク出情仕罷在候。素人方ニは巧者成ル取沙汰有之候へ共、病家取扱方之巧者ニ而、医案薬方之様子等承り候処、不相成ル儀共多有之様相見申候。先世上広ク勤候而年輩之者ニ御座候間申上候へ共、御実用之処ハ無覚束奉存候。当時於医学館御世話御座候ニ付、年若成ル御医師之内ニは右兩人より立越候而療治筋合宜キ者共数多御座候而、逐々御用立可申奉存候へ共、差当り候而之処甚弘底ニ付、無抛右兩人斗奉申上候。以上。

申十二月 多紀安長 吉田快庵

二日、亀井老岐守方江出ス (65a)。

先月中、奥御医師御入人可申上旨被仰付候ニ付、曲直瀬養安院・杉本仲温・千田玄知三人、書面を以て申上、外ニ杉浦玄徳儀も申上候処、猶亦右四人之外相応之者可申上旨被仰渡候間、別番兩人之者奉申上候。必竟、養安院儀は人柄宜候へ共肝心之病用数少、仲温儀は學術宜候得共年功満チ不申、又玄知儀は養安院・仲温方一等劣り候旨申上、又玄徳儀は學術宜候へ共、先年之失有之候ニ付、猶又御尋御座候御儀と奉恐察候。乍併実々之処、当時御用立可申者、先日申上候四人之外ハ一切無御座候。依之養安院・仲温兩人之儀奉願候へ共、万一前段之趣ニ而難被召出候ハ、何卒玄知儀奥医師被 (65b) 仰付候様仕度奉願候。一体、玄知儀、先月中申上候通り、人柄甚宜貞実ニ御座候へ共、養安院程ニは取極り不申、医学療治極々出情候へ共、仲温程ニ才気差働薄き方ニ御座候。乍去療用之儀は勿論、今日之事ニ付候而も聊籠略成ル儀は無御座、物事糙成ル性質ニ而、年輩と申差当り御用立、比へ者ニ仕候ハ、橘隆庵杯より一等も二等も上ニ而、当時仲間ニも玄知程ニ無之哉之者も御座候。仍而去寅年、杉浦玄徳儀、医学館世話役御免之節、玄徳跡役之儀、永寿院申上、玄知江被仰付、当時引続出情仕罷在候。是迄山本宗

英・吉 (66a) 田快庵兩人も逐々医学館世話役方奥醫師被仰付候儀ニも有之候へハ、此度若玄知儀奥醫師被仰付候而も非判入候者も有之間敷、一同気受も宜ク、子年以来厚ク御世話被遊候医学館御改定之御主意も別而相現し、一統出席御医師之励ニも相成り、逐々御用立可申英才之御医師共引立可申、誠ニ難有御儀ト奉存候。依之、養安院・仲温兩人難被召出御儀ニも御座候ハ、何卒玄知を此度奥醫師被仰付候様仕度、猶亦此段御内々奉願候儀ニ御座候 (66b)。以上。

申十二月 多紀安長 吉田快庵
同前

③西ノ丸側衆松平佐渡守の急死に関して誤診した小島春庵への処分について

西丸御側衆ナリ。

松平佐渡守殿容体、最初少々頭痛被致、何となく気分閉キ足指先冷、夫方肩背張り胸之内塞り候心持ニ而甚苦ク、逐々指之冷募り、肘膝迄冷上り候由。其節御外科古田瑞玄御広式ニ詰居候処、御小納戸頭取方針治被頼候旨申来候ニ付、御側衆下部屋江参り診候処、右之様体之上、脈は甚沈微ニ而仲々針治ニ而開キ可申 (67a) 様子ニ無御座候へ共、達而所望被致候間、少々斗り針仕候。御番医師小嶋春庵儀は瑞玄廻り候以前方右部屋江附添居候ニ付、薬剂主方承り候処、和中飲^{世ニ中飲此把振業漏ニ而候。} 振出用候旨申聞候ニ付、瑞玄申候は四肢厥冷之御様子甚キ故、四逆剂可然哉之旨申候処、薬加減可仕段申候而、春庵儀自分部屋江罷歸り、暫ク仕何か薬調合仕候而持参仕、佐渡守殿家来江渡し、是ハ煎用候様申聞候。仍而瑞玄儀方名承り候処、唯加減と斗り相答候。其内精神ハ随分慥ニ而言語平常之通りニ容体被咄候へ共、遺尿夥敷出候処一向ニ覺無之様子ニ而、無程嘔逆三度一向ニ何も出不申、三度目以後は精神昏塞、脈も絶し可申勢ニ付、瑞玄 (67b) 儀心付、漸ク天枢・気海等へ灸治仕候内、木村玄長相廻り診察仕候処、最早外ニ手段無之、参附湯可然段春庵江申候へハ、又々部屋江罷歸り暫ク過キ候而、参附湯之由ニ而薬持参仕相用候へ共、咽喉江納り不申、灸治数多仕候へ共通不申候由ニ御座候。

右之通り古田瑞玄并木村玄長申聞候。仍相考候処、全く陽脱之卒厥ニ而元氣暗ニ虚脱被致、一時ニ虚氣厥逆之趣ニ可有御座哉ニ奉存候。弥左様ニ御座候へハ、如何様成ル神丹靈劑も驗無之筈ニ御座候へ共、仮令効驗無之迄も、主当之薬を用ヒ万一を冀候儀ニ御座候。然る処、春庵儀、和中飲を用候は (68a) 全く食滯杯と輕ク見込候趣ニ而、且其節之取扱甚舒緩にて、一向危急之証とハ不存様子ニ相見候由ニ御座候。彼是不行届仕方之旨沙汰承り候ニ付、餘之御人ニも無之候間、御内々先頃申上候儀ニ御座候。猶亦逐々得と相糺候処、春庵儀左様ニ一向療治筋弁へ不申者ニも無御座、少々ツ、病用も手掛ケ罷在候由ニ御座候所、如何仕候儀ニ御座候哉、全く小身之御旗本杯斗り療用相達、是迄重立候御役人杯手掛候儀も無御座候処、風度御勤柄之衆と申シ御場所柄ニも有之、彼是心中惑乱仕、前後度ヲ失ヒ候より、右之仕合ニ罷成り候ニ相違無 (68b) 御座趣ニ候。右様之節之御備ニ、御番医師詰泊罷在候処、何共不束成ル始末ニ而、甚奉恐入候儀ニは御座候へ共、古キ御番医師之内ニは極意之処は春庵方不束成ル可有御座哉ニ奉存候。乍併前文之趣ニ付候而ハ、御内意ヲ以て病氣引き小普請入奉願候様可被仰付哉ニも候へ共、逐々承り候処、春庵儀勝手向不如意之内、若小普請入被仰付、御番料被召上候而ハ甚及難渋可申奉存候。左様ニ御座候ハ、御内意之趣ヲ以て以来之処急度厚ク心掛ケ可申段、得と私共方申聞候様ニ被成下候 (69a) 御儀は相成り申間敷哉。何れ其儘御沙汰無之被差置候而ハ御番医師仲間も沙汰仕候儀故、御示ニも不宜、且当人之為ニも御座候間、強キ御咎メ無御座、何卒御憐察之上御勘弁奉願候。仍而此段御内々申上候。以上。

申十二月 多紀安長

十六日、摂津守殿江

同月十九日、摂津守殿被仰聞候趣左之通。

春庵儀、佐渡守急症之節、取扱不行届は全く書面之通り前後度を失ヒ候ニ相違有之間敷哉。乍併右様御備之為、御番相勤罷在候処、書面之趣之手充ニ而は相濟不申候事ニ候。以来は厚ク心掛ケ出情

可致候。此段年寄衆へ(69b)も沙汰不致、拙者一人ニ而達候。乍併急度達候而ハ御咎ニ当り候間、唯話有之候趣ニ春庵へ可被申聞候。

同月廿一日、世話役千田玄知・御番医師遊佐朴庵立合、於医学館内々右之趣、春庵江申聞候。

③4小石川養生所見習いの候補者に関する評価

小石川養生所見習願候ニ付御尋

伊達本覚

右本覚儀年若ニは御座候へ共、眼療出情、医学館へも無懈怠出席仕、眼病人取扱罷在候。近辺町方病人も少々は有之哉ニ相聞候。格別才気も無之哉ニ御座候へ共、人物実貞にて悪敷風説等承り不申候。以上。

申十二月 多紀安長

九日、出雲守殿(70a)

小石川養生所村岡玄超明キ候ニ付、御入人名面御下ヶ御尋

中村玄種

右玄種儀、年輩ニも有之、数年家業厚ク出情仕、医学館へも無懈怠出席仕、病人多取扱手柄も間々有之候。才気ハ格別無之哉ニ候へ共、人物甚篤実ニ御座候。尤悪敷風説等承及不申候。

瀧野為伯

右為伯儀、年若ニは御座候へ共、才気有之、療用之方器用成ル様子ニ而出情仕罷在、医学館へも無懈怠出席仕、病人取扱申候。人物実貞ニ而悪敷風説等承及不申候(70b)

見習出役被仰付、五人扶持被下置

服部玄広

右玄広儀、若年方医学出情仕、田村元長ニ従ヒ本草物産之学も餘程相心得罷在、療用之儀当時随分出情仕、町家杯相応ニ病家取扱罷在候。人物は篤実ニ而悪敷風説承り不申候。年輩四十前後ニも御座候。

林長元

右長元儀、才気も有之哉ニは御座候へ共、至而年若ニ付、医学館江出席仕候へ共、格別病人数も手掛不申、程合駈ト相分不申候。人物等悪敷風説承

及不申候(71a)。

但右長元儀、養生所出役見習被仰付候御、私共江御尋無御座候。

申十二月 多紀安長

九日、摂津守殿江

③5養生所見習を長年勤めてきた御庭方鎌田庭雲への手当の申請

御作事奉行支配 御庭方 鎌田庭雲

右庭雲儀、御庭御用無御座候ニ付医業心掛、近辺療用も相達候ニ付、奉願養生所見習十一年相勤候処、病氣ニ付御免之儀奉願、御免被仰付、其後病氣全快ニ付再勤被仰付相勤罷在候。然る処、此度養(71b)生所本道本役明キ御座候ニ付、右跡役本勤奉願候旨ニ御座候。乍併一体御医師ニ無御座、誠之餘業ニ療用仕候儀故、如何可有御座哉。庭雲儀、私父永寿院門人ニ御座候へ共、深数学ヒ候ニも無御座、一己之修行ニ而世上一通之穩当成ル療治方を覚罷在、病人相応ニ取廻シ候迄ニ而、格別秀候儀は無御座候ニ付、御医師並ニ被仰付候様仕度段奉願候儀も申上兼候。乍併見習トハ乍申十五年之間御手充も無之、病人数多療用仕候ニ相違無御座、当時甚困窮仕罷在候儀ニ御座候へハ、勤候内何卒相応之御手充成共被下置候儀は相成申聞敷哉(72a)。何分ニも右規模相立候様被成下候様仕度、此段奉願候。以上。

申十二月 多紀安長

十九日、摂津守殿江

当暮年々白銀七枚ツ、被下置。

③6石坂宗哲への加増の申請

小普請組 戸田中務支配 石坂宗哲

右宗哲儀、寛政八辰十二月廿二日甲府針科医師取立之儀被仰付、翌巳二月廿八日甲府表江到着仕、講書并経絡穴所取り、針術手段之筋合迄相談仕候処(72b)、逐々出情之者出来仕候ニ付、当四月中被召歸、五月十五日初而御目見被仰付、誠ニ難有仕合奉存候。然ル処、持高五人扶持ニ御座候所、御目見以上之格ニ罷成り、万事甚必迫ニ而取続出来兼可申哉ニ付、難涉至極仕罷在候旨ニ御座候。於甲府数年骨折候御褒美は是迄ニ無之、御目見被

仰付候ニ而冥加ニ叶相足り候へ共、帰府後弥針術出情仕罷在候儀ニ御座候へハ、何卒相応之御手充被下置、取続キ出来候様被仰付候様仕度、此段奉願候。以上。

申十二月 多紀安長 山崎宗運
廿日、出雲守殿江（73a）

⑦御目見医師井上宗隆、御広敷廻り勤続につき褒美申請

御目見医師 井上宗隆

右宗隆儀、出生河越之者ニ而父ハ井上玄甫と申同所町医師ニ而御座候処、宗隆儀若年節御当地江出府仕、御医師船橋長庵弟子ニ罷成り、糒丁辺町療治仕、其後河野仙寿院弟子ニ罷成り、御目見仕候。然ル処、奥女中菊野と申候者願ニ依て御広敷廻り被仰付、当年迄十四五年も相勤罷在候。菊野勤居り候内は病用も多有之度々御広敷江廻り候得共、菊野下宿仕候以後は病用も減し候様ニ相成り、且御（73b）広式病用ハ外々とも違ヒ老人之病人ニも殊之外手間取候儀ニ而、外病用之差支ニも相成り候故、自然と廻り方遠ク病用も当時は別而稀ニ御座候。番町辺出火之節、類焼仕候以後は勝手向不如意ニ罷成り、其上年來六十餘ニも相成り、老年ニ及ヒ外ニ推張り勤兼候故他病用も少く、当時困窮之趣ニ相聞候。一体不才之方ニ而医業之儀格別成ル儀も無御座、一通り世上有触レ候穩成ル療治方を仕覚、病人取扱手狎レ候迄ニ御座候。人物質

朴成ル様子ニ相見、悪敷風説承及不申候。

申十二月 多紀安長
廿日、出雲守殿（74a）

⑧御守殿女中の担当を小児科人見高德にさせたい旨の願書に対する意見

奥詰御医師 淑姫君様御附 高栄倅 人見高德

右高德儀、此度御守殿女中病用奉願候旨、年来之儀は廿九歳と申上候処、見分ニ而は十九廿斗リニも相見、惚体甚若年成ル様子ニ御座候。右ニ付医学館ニ於て病人餘り取扱不申候ニ付、療治手際之程駈と相分不申候。何れ当時修行最中ニ而可然奉存候。且御守殿女中病用奉願候は如何之儀ニ御座候哉。高栄儀は小児科故、淑姫君様御附被仰付候処、女中病用は大人科ニ無御座候而は相成不申、当時（74b）御本丸女中病用相勤罷在候御医師ニも小児科は老人も無御座候。科違ト申、彼是心得互ニも可有御座哉ニ奉存候。一兩日以前、私共へも餘人ヲ以て内々相談御座候得共、右之趣ニ付しかと及挨拶不申内願書差上候仕合、私共ニ於ても恐入奉存候。以上。

申十二月 多紀安長 吉田快庵
廿一日、高井飛驒守殿江

但高栄願書は淑姫君様御用人宇田川平七ヲ以て差上候旨ニ候。○不相成旨、飛驒守殿平七江御申聞、願書下ル（75a）。